

UFO contactee

GAP JAPAN NEWSLETTER



UFOと宇宙哲学の専門誌

コンタクタイ

円盤に乗った日本人少年
ブラジル人教授の円盤搭乗事件
太陽系の各惑星に知的生物が存在?!

WINTER
1985

91

地球の哲学と宇宙哲学の相違
日本GAP創立25周年記念総会
GAP海外研修旅行でピラミッド上空にUFO出現



UFO contactee 第91号目次

〈巻頭言〉 重大な松山事件	1
円盤に乗った日本人少年	伊藤達夫 2
ブラジル人教授の円盤搭乗事件	18
質疑応答(1)	G・アダムスキー 22
GAP短信	27
〈トピックス〉 太陽系の惑星に知的生物が存在!?	28
残念な話/デンマークGAPより	
地球の哲学と宇宙哲学の相違(1)	松原真弓 30
大盛況/60年度日本GAP総会	36
〈投稿欄〉 コーコン広場	38
〈予告〉 60年度地方支部大会4)	39
〈報告〉 エジプト・イスラエル宇宙考古学の旅	田中正 40
〈報告〉 61年度「アメリカ・メキシコ宇宙考古の旅」	41
〈報告〉 静岡UFO写真展/〈予告〉 第2回松山UFO写真展	42
〈広告〉 アダムスキー全集/英文版Uコン	43
全国月例研究会案内	44



GAPについて

GAPは、知覚する運動、という世界の世界的なグループ活動で、世界の人がUFOの真相について知る機会を与えられるべきであるという目的に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創設された。他の目的は、最大多数の人が現代の真実を究明し、人類の進歩に貢献することである。人間はすべて、「コスミック・エナジー」の宇宙の法則が宇宙に運搬している。この法則は他の世界（惑星）で学ぶための重要な鍵と見なされた。「生命の科学」の研究と理解を通して世界を変革する。

日本GAPの目的はUFOとスペースフラグgers問題に関心ある人々に応答することであり、責任活動を通して真実の解明と宇宙の法則の究明を呼び起こすことにより達成することです。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星には、偉大な発達を遂げた人類が居住している。彼らは、地球が他の惑星政府にその真相を隠している。

2. 他の世界から来る人々は、この世界の政治家や科学者とひそかに連絡し、地球の進歩を促進しようとしている。地球に対して敵意の中心として、彼らは、彼らを問おう。スペースフラグgersは、この世界の進歩を促進しようとするが、通常、その真実を隠している。

3. この太陽系の他の惑星には、人類の精神の向上と地球の進歩に不可欠なものは、人類の進歩に不可欠なものである。人類は他の惑星に個人を派遣するのではなく、彼らと関係の深い情報交換を行うべきである。彼らは、彼らと関係の深い情報交換を行うべきである。

またも四国で大事件が発生していたことが判明した。五十五年前とはいえ体験者ご本人は健在なのだから印象は強烈である。「もつと大きな鯨が見たい」と坊やが言うので、「よし、もつと降りてみよう」と異星人のおじさんが円盤を海面近くまで降下させたというのは、まるで童話の世界だが、しかも儼然たる事実だというところにたまらない魅力がある。かりにスペース・ピープルが大物政治家にひそかにコンタクトして、「×億円もらったことを白状するほうがよい」と忠告したことが

〈巻頭言〉 重大な 松山事件



あったとして、それが明るみに出たとしても一向に面白くないが、純粹無垢の五歳の少年と神に近い異星人とのテレパシーによる接近、一夜の円盤搭乗、アブラハムの子と告げられた事実は、アダムスキーは別として世界で類のない大変な出来事だといえるだろう。

この事件には重要な要素が二つある。異星人が少年をテレパシーで呼び出し、坊やもテレパシクな感受力で引き寄せられたことが一つ。他の一つは船内に金星人オーソンとおぼしき人がいたことである。異星人とのコンタクトに

際してテレパシーが不可欠の手段であることは論をまたないが、アダムスキーが一九五二年十一月二十日にアメリカのモハービ砂漠の一角デザートセンターで会見した金星人オーソン氏（オーソンというのはアダムスキーがつけた仮の名前）が、実はそれよりも二十二年前に日本に出現して日本人と会っていたということになれば事は重大である。アダムスキー問題にたいする有力な傍証になるし、日本GAPの活動に大いなる意義が生じるからだ。というのは、この松山事件の発掘は日本GAP松山支部の伊藤達夫氏を通じて行われたのであって、それは氏が一大勇気をもってアダムスキーのUFO写真展を開催したことが動機となっているからである。

推測だが、五十五年前に松山市郊外で発生したこの大事件は、すでに今日の状況をスペース・ブラザーズが予測した上で起こしたのではあるまいか。

「いざれ日本の一グループの手によって明るみに出る」と。そうだとすればこの松山事件もアダムスキー事件もスペース・ピープルによって周到に計画された一連のスペース・プログラムの一端をなすもので、おそらく百年先を見通した全地球的な接近計画であったのかも知れない。

とにかく日本GAPの活動はこれでもって第三期の時代を迎えたことになる。第一期は島根県の片田舎でアダム

スキーと連絡をとりながら細々と続けた約十五年間の開拓時代、第二期は東京へ進出して展開した約十五年間の本格活動時代、第三期は昨年頃から突入したコンタクト時代である。今後十五年間で日本GAPがどのような成長をとげるかは大体の見当はついていないが、未来のことであるから断言はできない。ひたすらに宇宙的人間を目指して努力するのみだ。

最近、イギリスの高名なUFO専門誌「フライイング・ソーサー・レビュー」の編集陣もアダムスキー問題を重視する傾向を示している。バケモノみたいな宇宙人には飽きがきたといい、もつと社会的に受け入れられる異星人の出現報告を望んでいると表明し、ブラジルの教授による円盤搭乗事件に見られるような、心あたたまるとような高貴な異星人を「アダムスキー・タイプ・オキユバント」と表現しているほどだ。

日本GAPの主張や活動は決して間違っていないが、と確信する。いまでも多くの反論や異論はあるけれども、真実はいつか必ず表面化するだろう。

今年には日本GAP創立二十五周年記念として九月二十二日に東京銀座の銀座ガスホテルで盛大な総会が開催された。しかし実際に編者がアダムスキーと文通を開始して研究活動を始めたのは昭和二十八年であるから、実質的には三十二年になる。この間世界に多数

のUFO事件が発生し、騒然たる議論が行われ、無数のUFO関係者が泡沫のごとく消えて、大半の事件は忘却の彼方に没した。

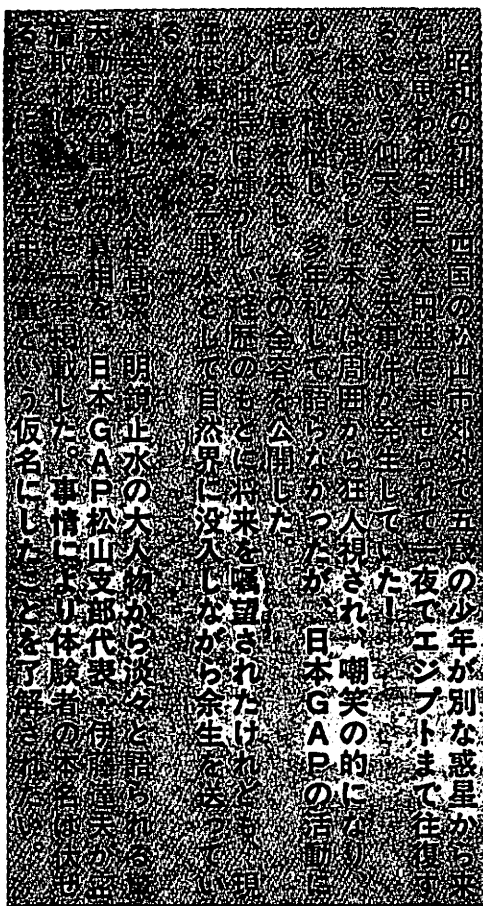
しかし絶対に消滅しないものがある。それはアダムスキーの残した大いなる遺産——彼の宇宙的体験記と宇宙哲学だ。しかもこれの信憑性の傍証となるような大事件が近頃日本で発生したり明るみに出たりするのだ。そしてその発表に關与するのは日本GAPなのである。これが何を意味するかは先に述べたとおりである。

ただしエリート意識は排除し、あくまでも謙虚な態度で実践に励みたい。GAPのごとき宇宙的な研究啓蒙活動に専念するにはある程度の宇宙的カルマ（宿命）を持つ人でないとい長続きしないのが普通だが、去って行く人にも祝福の想念を送り、その幸福を願いたい。こうしてテレパシーを駆使する高貴な宇宙的人間の集団となるように会員一同結束して活動を展開することが望まれる。日本GAPは単なる猟奇趣味的なUFO研究団体ではないからだといい、宗教や道徳団体でもない。科学を主体にした宇宙的な団体である。アダムスキーの金星文字を解説して円盤や母船の推進原理に関する大研究をやっている会員・遠藤昭則氏の発見事は磁気関係の科学そのものであり、テレパシーも精神分析学や物理学にもとづく科学的なのだ。

●「アブラハムの子」といわれた坊やの驚異体験実話

円盤に乗った日本人少年

伊藤達夫



昭和の初期、四国の山形市郊外、五歳の少年が別な惑星か。平
夜でエンジンまで往復す
た。嘲笑の的に
日本GAPの活動に
の全容を公開した
の歴史をもとに将来を展望されたけれども
自公界に没入しながら余生を送る
明神止水の大人物から次々と明らか
日本GAP松山支部代表、伊藤達夫の
事情により体験者の本名も区別
仮名にしたことを了解

UFO写真展会場での秘話

この偉大な人物の存在を初めて知ったのは、昨年（五十九年）十月に松山市で開催した「アダムスキー全集完結記念UFO写真展」の会場にいたときである。

開催期間中のある日、会場の受付に座っていると、一人の紳士が近づいて

私にささやいた。

「松山の郊外に、子供の頃、空飛ぶ円盤に乗せてもらった人がいます」

驚いて聞き返すと、紳士は概略を語った。

昭和の初め頃、松山市の郊外に住んでいた五、六歳の少年が、一人の不思議な人物と知り合いになって、仲良くしていた。そのおじさんは背の高い白

人タイプの男で、宣教師風の服装をして、ときどき夜になると少年の家にやってきて、一種のテレパシーで少年を呼び出す。そして抱っこしたり手をひいたりして夜の田舎道を散歩した。ときにはアメをくれたり、当時は珍しい三輪車をくれたりした。

ある夏祭りの夜、人々が寝静まってからおじさんは坊やの手をひいて、神社から離れた暗闇の草原に停止している巨大な物体の中へつれ込んだ。内部には白い服を着た数名の大明がいて、こころよく迎えた。おじさんが言う。「坊や、行きたい所があればつれて行ってあげるよ。どこへ行きたいかね？」

「鯨と象が見たいんじゃない？」

「よし、見せてあげよう」

現在は空飛ぶ円盤といわれるこの巨大な円型の物体は上昇して、どこへともなく飛行した。やがて機体は明るい大海原の上空を果てもなく飛んで行く。すると眼下に大きな鯨が数頭、潮を吹きながら遊弋している光景が見えて、少年は大喜びした。

次に円盤はどこかの大陸のジャングル地帯の上空を飛んで降下した。草原に大きな象の群れがいる。歓声をあげる少年に、おじさんが言った。

「もっと見たいものはないかい？」

「じゃ、エジプトのピラミッド！」

「よし、ピラミッドへ飛んで行く」

円盤はしばらく大砂漠の上空を飛行して、やがて雄大なギザのピラミッドが見えてきた。スフィンクスも見える。大喜びする少年を乗せた円盤は、まとも上昇して長時間の飛行後、もとの松山郊外の草原に着陸した。機内から出る前に一同の前でおじさんが言う。「坊や、あんたはアブラハムの子だ。このことをよく覚えておきなさい」

アブラハムとは何のことやらわからなかったが、少年はその名前だけはしっかり記憶した。

朝方、帰宅すると、行方不明になった少年の捜索で大騒ぎになっていた。少年は一部始終を話したが、みんな大笑いして全く信じない。夢でも見て寝とぼけていたのだ、気が狂ったのだと

あざ笑う。アブラハムの子だと言われた件も、隣の部落の油屋の子ということにされてしまった。

ひどい罵倒と嘲笑をあびた少年は、以来、この不思議な体験を黙して語らなくなつたが、後年信用のおける少数の友人知己には洩らしていた。

以上が概要である。UFO写真展会場に私に伝えた紳士も少数の友人の一人であつた。そして名も告げずに立ち去つたのである。

だがこの紳士も用心深くて体験者の氏名を明かさなかつた。本人はいまもって健在だというのが、どこのだれなのか見当がつかない。昨年上京した折に日本GAP会長の久保田先生にこの話を伝えたところ、強い関心を示された先生から、ぜひ探し出して詳細な取材をするようにとの指令と激励を頂いたが、手がかりになるような情報もなく、それなりの努力を続けたけれども一向に成果があらぬまま、むなしく月日が経過した。

だが私たちのGAPは、たんなる猟奇趣味の集団ではない。壮大なスペース・プログラム（友星人による地球救済計画）に協力する宇宙的な活動グループである。スペース・プログラムの遂行上、この事件の公表が必要ならば、スペース・プログラズ（進化した友星人）からの援助があるものと確信し、必ず探し出せるという信念を持ち続けていたところ、果たせるかなこの願望

は意外な経過をたどつて急転直下の解決に至つたのである。

不思議な動機でつきとめる

本年五月中旬のある日、今治の市街は春の大祭で賑わつてゐた。その日の午後、所用で外出した帰り道、自家用車である町角の喫茶店の前を通りかかつたとき、ふとその店の中へ入りたいという衝動がわき起こつた私は、車をとめて中へ入つて行つた。

入口のボックスの中に置いてある客用のローカル雑誌を無造作に手に取つて、何気なくパラパラと頁をめくつていくうちに、ある頁に掲載されている写真が目にとまつた。手入れの行き届いた庭をバックに一人の初老の男性が作業服姿で立っている。

「この人だ！」と私は内心叫んだ。

容貌にみなぎるただならぬ気配と爛々たる眼の輝きが、ただの人物ではないことを如実に物語っている。住所氏名も判明した。

「やつと見つけたぞー！」
欣喜雀躍した私はこの不思議な発見の動機を与えてくれたと思われるスペース・プログラズに感謝した。

本人はすこいテレパシスト

翌日の午後、せきたてられるような焦燥感と、かつてないほどの祝福の想

念にかられて、じつとしていられなくなつてきた。「今すぐ松山へ行け」という衝動がわき起こる。

「よし、行こう！」

意を決して松山へ車を走らせた。本人に直接対面しようと思つたのだ。現地に着いたのは午後四時半頃で、本人は運よく自宅におられて、庭に水をやっておられるところだつた。事前連絡なしの不躰な訪問をとがめられはしないかと不安感がよぎる。

近づいて行くと、人の気配に気づかれたのか、本人はこちらへ視線を向けた。互いに微笑して目礼を交す。

しばしの雑談の後、二人は縁側に腰をおろした。驚いたことに本人は私の来訪の意図を見抜いておられ、黙秘しているはずの少年時代の驚異的体験をみずから話し始めたのである！ 相当なテレパシストらしい。

やはりこの人だった！ いま面前にいる人こそ、四千年前にイスラエル民族の父と謳われてパレスティナで活躍した偉大なアブラハムの、その子（たぶんイサクか？）が転生した姿としてここに座っているのだ！

アブラハムの子の名を天中 童と名乗り、初対面の私を前にしてまるで旧知の仲のように打ち解けながら、少年時代の思い出を輝かせて語つた。そして真面目な関心をもつ多くの人に自分の体験が役立てば望外の幸せてあると言ひ、本誌に記事を掲載すること

を快く許可された。日本GAPを心から信用してのことであらう。氏のご好意に深く感謝した。

豊かに稲穂が広がる田園地帯の一角に位置する氏の邸宅の立派な庭をながめながら、氏はしっかりと口調で語り始めた。その言葉はかなり標準語に近いが、ときどき土地の訛りが顔を出して、松山の穏和な気風をかもし出す。

不思議なおじさんとの出会い

「物心がつき始めた二歳の頃だったと思います。夏のある夜、家で床に入っていると、とても温かくて優しい喜びに満ちた気分になつてくるんです。だけれど「坊や、出ていらつしやい」と優しく囁くような気がするんです。

それでふと外へ出たくなって、一人で出てみると、家のそばに白い服を着た、とても背の高い、きれいな金髪のおじさんが微笑して迎えてくれたんです。

おじさんといつても実際は若々しい青年なんです——。親愛感に満ちた笑顔で、「坊や、いらつしやい。抱っこしてあげよう」と言つて私を抱いてくれました。

前向きに抱っこして両手で私の両足を下から支えるようにして、あたりの夜道を散歩してくれるんです。神社のそばの道を通つて、田んぼの中の墓地のそばをよく抱っこしたまま歩いてく



れました。

しばらく散歩して家のそばまで帰ってくる、私を下へ降りろして、どこかへ行ってしまいました。

——抱っこしてもらっているときの気分はいかがでしたか？

「それはもうとても気持ちよかったです。温かく包み込まれたような感じが起きましたね。抱かれていますと、おじさんの温かい人格が伝わってくるように、それはそれは嬉しかったものです」

——そんな体験がたびたびあったのですか？

「毎年夏になると、ときどき起きました。夜になるとあの嬉しい気持ちがわき起こってくるんです。そこで急いで外へ出てみると、あのおじさんが出迎えてくれて、私を抱っこして、長いときは一時間以上、短いときで十五分ぐらい歩いてくれることがありました。お宮や墓地の周囲をよく歩いてくれたものです。」

珍しい三輪車をもらう

おじさんは私をととても大切にしてくれました。ときには「坊や、これをあげよう」と言っておアメをくれたり、お菓子をくれたりして、私をあやしてくれました」

——ほかに何かくれたものがありますか？

▼おじさんに抱かれて散歩した道。昔とは様子が変わっている。



か？

「そうじゃあ、なにか白いスズメの形をした陶器で出来たような物をくれたですね」

——何に使うものでしょう？

「それはよくわかりません。なぜこんな物をくれたのかは不可解でした。しかしおじさんからもらったので、しばらくは大切に持っていました。」

またあるときは「坊や、これをあげよう」と言ってお、三輪車をくれたことでもありますよ」

——えっ？三輪車を？

「そうですね。夜おじさんが持ってきてくれたんです。それを喜んでもらって帰ると、家で乗って遊んでいました。家族は私が三輪車に乗っているのを見

て驚いたらいいんです。

「その三輪車はどうしたんじや？」と、けげんな顔をして尋ねるので、「おじさんからもろうたんじや」と答えると、「このだれかわからん人からもろうた物に勝手に乗ったらいかんがろうか」と叱りましたが、気にせず平気で乗りまわしていました。

当時、子供用の三輪車はこの地方では全く売られておらず、全国でもほとんど出まわっていませんでした。出始めたのは、それから五、六年後のことです。

——どんな車だったのですか。

「銀色でした。その後しばらくして市販され始めた三輪車は鉄製で、パイプの中が空洞になっていましたが、私もらった車はパイプの中まで金属が詰まった細い棒で出来ていました。まるで丈夫なハガネか合金のような金属でしたね」

——使ってみて故障や具合の悪いことはありますか？

「すごく丈夫な車でした。故障が全くないんです。普通なら初めての製品というの出始めは必ずあちこち使い勝手が悪かったり、予期しないトラブルが発生したりするものですが、この三輪車は全くそんなことがないんです」

——毎日乗りまわしていたのですか？

「そうです。嬉しいものだから自転車に負けないくらいのスピードで走りまわったのです」

天中氏の話によると、そのハガネの

ような合金の金属は、当時の日本の技術では造るのがむつかしかっただろうという。ひよっとするとその三輪車は外国製か、あるいは別な惑星で造られたものかもしれない。だいいち、このおじさんというのが不思議な人物である。夏になるとやって来るといこの

金髪の白人タイプの大男は、どう考えても松山市内や近郊に住んでいた人間ではない。円盤で飛来したのではないだろうか。そして家屋を開放したがる湿度の高い日本の夏を選んだのではあるまいか。

——その車はその後ずっと家に置いてありましたか。

「いや、私が小学校に入る前に鉄クズ屋さんに売ってしまいました」

奇妙な箱を与えられる

——ほかにおじさんからももらった物がありますか。

「いつだったか、おじさんから銀色のシガレットケースくらい大きさの金属製の箱をもらったことがあります」

——大きさは？

「そうですね、縦八センチ、横五センチ、厚さが八ミリぐらいあったと思うんじゃないか」

——何か模様が入っていませんか？

「ただし箱の表面にはピラミッドのよ

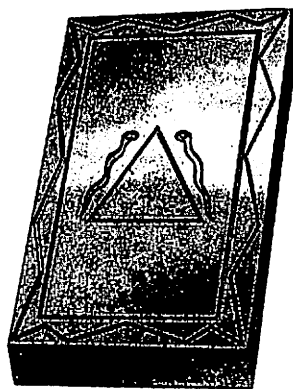
うな三角形の図案があって、その両方の斜面をへびが身をくねらせて登っている図が彫り込んでありましたね。不思議な図案でした。そのまわりを縁にそって三角を並べたような線がとり囲んでいたのを記憶しています」

——その箱はその後どうされました？

「持ち運びに便利なので、よく小銭を入れていました。おじさんからももらった箱なので、とても大切に保存していました」

天中氏はおじさんからその奇妙な箱をもらったことを家族や友人にも話さなかつた。家にいるときは机の引き出しの中へ入れておき、外出の際はいつも上衣のポケットに入れていた。

中学(旧制)から大学に入った頃までは持っていたが、太平洋戦争の終戦時の大混乱のさなかに紛失したという。全く惜しいことをしたものだ。これがあれば事件の重要な物的証拠になるし、箱の表面の模様も謎の解明の糸口



になるかもしれない。ピラミッドの側面を登るへびの図柄も、どうみても地球的なデザインではなさそうだ。

またおじさんがやって来た

いよいよ天中氏の円盤搭乗の体験談が始まる。私ははやる心を抑えて身を乗り出した。

「あれは昭和五年の八月二日の夜のことじゃった。私は当時五歳でした。」

その日は部落の鎮守のお祭りであつた。お宮の前の路上には沢山の出店が並んで、水アメや氷菓子など子供たちが喜びそうなものを売っておりました。

私も夕方になると浴衣に下駄ばき姿でお宮の境内へ行つて遊んだものです。境内は参拝の人でごった返して、それは賑やかなものでした。そのうちに遊び疲れたので、家に帰って床に入っておりました」

——その夜、円盤に乗ったのですか。

「そうです。お祭りも夜九時頃になるとみんな家に帰ってお宮のあたりは静かになるんです。今から思うと、その頃を見計らってお宮の近くの広場に着陸しようです」

——つい先刻までお祭りして賑わっていたお宮のすぐそばに着陸したとは、ずいぶん大胆ですね。

「お宮の中は照明で明るいんですが、そこから一歩外へ出るとまっ暗闇になり

ます。ほとんど何も見えません。その
 明暗の差を計算に入れていたのかもし
 れません。

その晩、九時すぎでしたが、家族は
 みな床に入っていました。私も寝巻き
 にしていた浴衣に着替えて横になっ
 いたんです。

すると例によって、とても温かくて
 何かに包み込まれるような嬉しい気分
 になったんです。だれかが優しく自分
 を呼んでいるような気がする。「坊や、
 外へいらつしやい」と。

それで床から起き上がると一人で家
 の外へ出てみました。すると家のすぐ
 そばに、いつものように背の高い、白
 い服を足元まで垂らしたおじさんが立
 っているんです。

とても優しく温かい雰囲気を放つ
 人でした。背は高く二メートルぐら

暗闇の中を巨大な円盤に搭乗!

このおじさんが「坊や、一緒につい
 ておいで」と言うので「うん」と答え
 て気楽についてゆきました。

手を握り合って少し歩くと、さつき
 お祭りが終わったばかりのお宮の所へ
 出ました。お宮の前を通過して百メー
 ルほど田んぼの小道を歩くと墓地があ
 るんです。この墓地は夜になると人魂
 が出るというので、だれも怖がって近
 寄らないんです。

その墓地を通り抜けると、すぐ近く

いはあったと思います。見上げるよう
 な大男でしたね。

頭は女学生のような金髪のオカッパ
 で、顔は白人のように白く、彫りが深
 くて、目は大きかったようです。顔の
 皮膚はツルツルして滑らかでした。ヒ
 ゲも生えていなかったと思います。

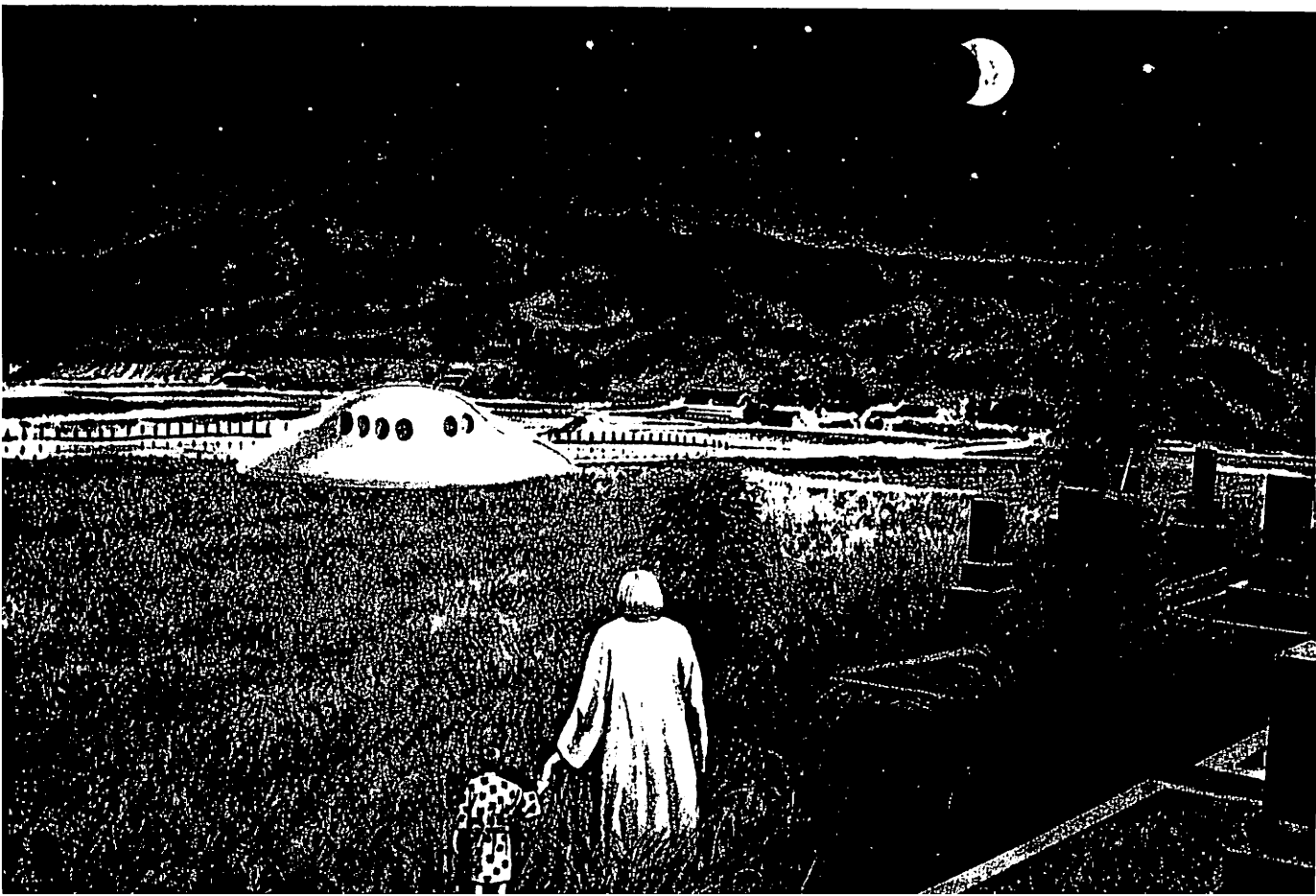
服装はアラブ人やエジプト人が着る
 ベルトのない足まである長いだぶだぶ
 の服に似ていました。二年前に家内と
 エジプトへ行つたときに見た現地人の
 服装がよく似ていたようです。一種の
 宣教師スタイルといってよいでしょう。
 とにかく袖の長いゆったりとした白い
 服と白い靴が記憶に残っています。靴
 は先がずんぐりした丸味のあるもの
 でした。

このおじさんは日本語で話しました。
 とてもきれいな標準語です。

に幅が百メートルぐらいの細長い池の
 所に出ました。その池とお墓のあいだ
 に雑草が生い茂った野原があるんで
 す。その野原にとつともなく大きな物
 体があつたんです。

この物体は明かりを消して薄暗い状
 態で着陸していたようです。少しばん
 やりと全体の輪郭がわかる程度に光っ
 ていました。

——頂上に球や、下部に着陸装置など
 は見えませんでしたか。





「かなり暗かったので、大体の形はわかったのですが、細部はわからなかったですね。」
 直径は少なくとも三十メートル以上はあったと思います。そうじゃなあ、四十メートルぐらいはあったかもしれませぬ」
 — アダムスキー氏が乗ったのは直径十メートル程度の大きさだったということですが。
 「いや、とても十メートルどころではありませぬ。もつとはるかに大きな物体に着陸した。」

てしたね。

おじさんが「坊や、おいて」と手をつないで中へつれていってくれました。おじさんにはふだんからなついていたので、すべて任せきった気持ちになり、不安や恐怖心は全く感じませんでした。その頃はUFOや円盤のことなど、だれも知らない時代のことですから、なんだか大きな物が野原に着陸しているな、ぐらいにしか思わなかったんです。

あのおじさんは今から思えば明らかに異星人ですね。円盤の中へ入ると四、五人の人がいて私たちを迎えてくれました。みんなおじさんの仲間だったようです。

男たちは白いガウンを着ていた

どの男たちもおじさんによく似た、とても背の高い人たちでした。頭つきもみんな白人タイプで、頭は金髪のカップです。やはり白くて長いガウンのような服を着ていました。ただおじさんの服と違うのは、首と両手の部分に丸い穴があいており、そこから首と両手を通して着るようになっていた点です。おじさんも中へ入ると長袖の服を脱いで、それに着替えていたようです」

白くて長いガウンのような服と聞いて私はハッとしました。イエスの磔刑後、夜間墓地へ入り込んで蘇生させた二人

の男も白い衣を着ていたし、復活後にイエスが円盤に乗せられて上昇するときにも、白い衣を着た二人の男が「これと同じ状態で(つまり円盤に乗って)またおいてになるだろう」と弟子たちに言ったと、アダムスキーが語った言葉を思い出したからである(本誌90号掲載記事「イエスと転生」より)。
 この白い衣のような服というのは電磁気を絶縁するための保護物として着るのではあるまいか。

天中氏は語る。

「私はそのとき丸坊主で、白地に紺色の井桁の模様の入った浴衣を着て、下駄ばきでした。」

中へ入るとおじさんが「坊や、これに着替えなさい」と言って、私の体に合った子供用の白い服を着せてくれました。他の乗員たちと同じスタイルのガウンで、頭からスポツとかぶって、両手をスツと左右に出すと完了です。それから下駄を脱いで、白いサンダルのような靴をはかせられました。

そして肘掛け椅子に座らされたんです。椅子には安全ベルトがついていて、それをおじさんが締めつけてくれました。機内ではこのおじさんがすべて私の面倒をみてくれたんです。

金星人オーソンに

酷似した人がいた!

おじさんを含めてみな若々しい青年です。おじさんといつても子供から見

るとおじさんのように見えるだけで、実際は瀟々とした若者です。

おじさんをいれて五人ほどは男でしたが、そういえば一人だけ女のように見える人がいましたねえ。

その人は明るい茶色の上下続きの服を着ていました。首の部分が丸くて、腰には幅の広いベルトを締めていたようです。下はズボンをはいており、先は絞ってあって、長い袖の先も絞ってありました。靴も茶色です。

髪の色も覚えていません。その人の髪はとても長くて両肩のうしろまで垂れ下がっていました。色は金髪です。とてもきれいな髪でしたね。

身長は小柄で、日本人の平均的な身長と同じぐらいです。一メートル六センチ台ではなかったかと思えます。ほかの人が二メートルもある堂々たる大男なので、よけいにその人が小柄に見えたわけです。中肉中背でとてもきれいな人なので、てっきり女の人だと思ひ込んでいました。

顔の色は白人タイプではなくて、むしろ日本人の皮膚の色に似ています。やや茶色っぽい感じでしたね。他の人が色が白いのので、よけいにこの人の黄色人種的な顔が印象に残っています。目の大きさは覚えていません」

私はここで持参した資料の中からオーソン肖像画のカラー写真を出して見せた(オーソンについてはアダムスキー全集第1巻「宇宙からの訪問者」に

詳細記事掲載。

——これはアダムスキー氏が一九五二年にアメリカの砂漠で会見した金星人の姿を絵に描いたものでして、約八五パーセント正確だといわれているのですが、天中さんが会われた人に似ているでしょうか。

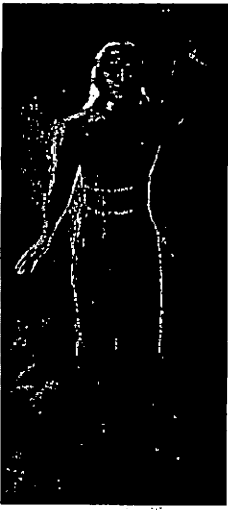
しばらくオーソン肖像画を見ていた天中氏は、やおら口を開いた。

「うん、姿かたちがよく似ていますね。服装などはほとんど同じじやなあ。顔も大体こんな感じですね。髪（かみ）の感じも同じだし。全く同一人物だとは断言できませんが、姿かたち、それに雰囲気は非常によく似ていますねえ」

——その女性のような人や他の乗員に接して緊張感や警戒心は起こりませんでしたか。

「そんなことはありません。みんな優しくして温かい人たちがかりました。普通の人間と同じですよ。人間そのものなんです。とてもくつろいだ気分です。過すことができました」

金星人オーソンの肖像画



中心部に大きな円柱が——

このときおじさんが坊やに言った。「坊や、どこへでも行きたいところへ行って行ってあげるよ。どこへ行きたいかね」

まさかそんな所へつれて行ってくれるはずはないと思つたが、坊やは思ひきつて言った。

「おじさん、ぼく鯨（くじら）と象（ぞう）が見たいんじや」

「よし、それじゃあ鯨と象のいる所へつれて行ってあげよう」

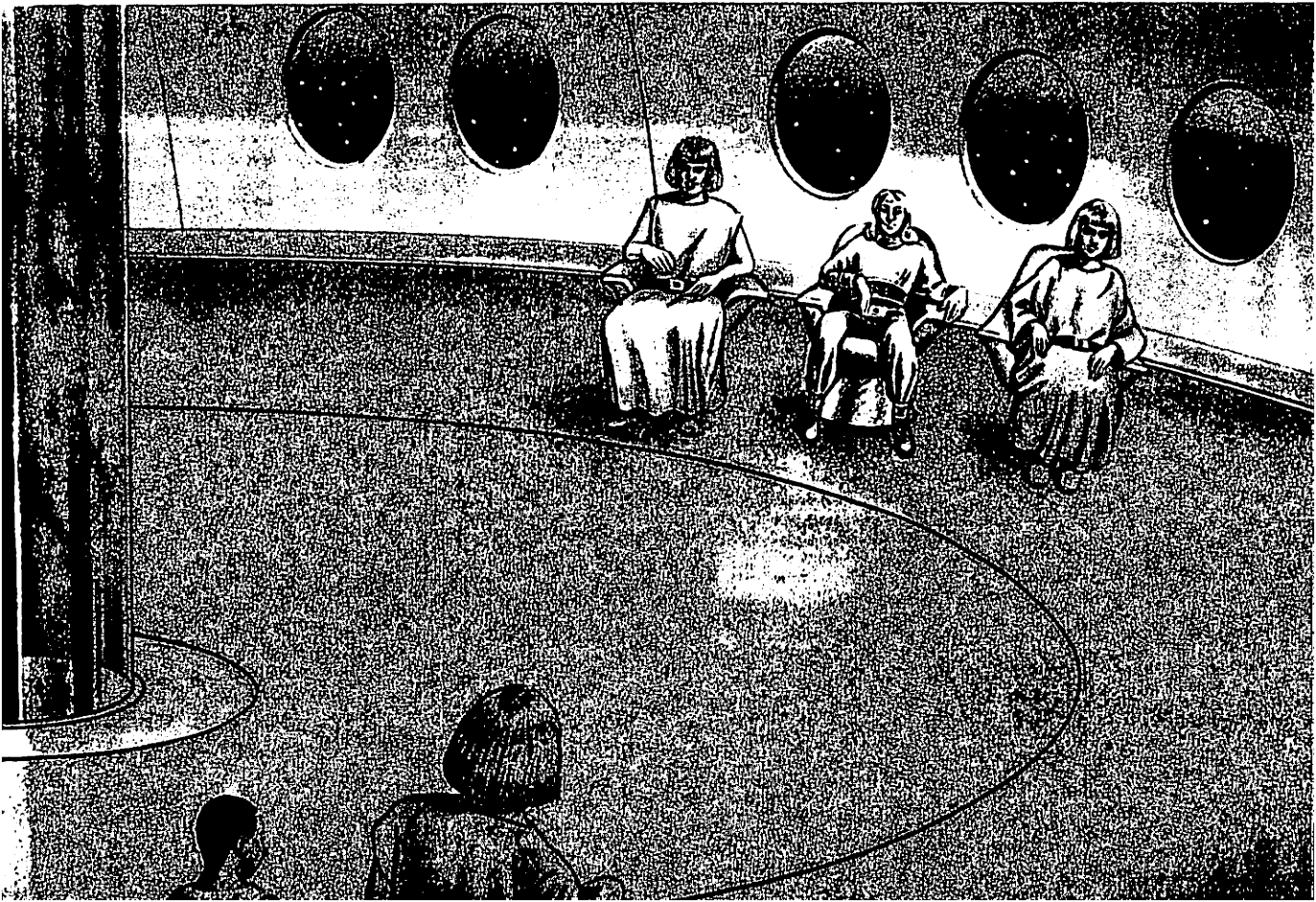
機体は音もなく飛び上がって飛行し始めた。離陸のときに少しグラグラ揺れたような感じがしたが、安全ベルトを締めていたので心配はなかつた。

揺れたときに隣の椅子に座つていたおじさんが、坊やの体を支えてくれた。飛行中はほとんど動揺はなく、安定した飛行だった。他の人たちもそれぞれ壁に沿って置いてある肘掛け椅子に座つていた。

壁にはいくつかの大きな窓があつたが、まん丸ではなくて楕円形である。

座つている坊やのすぐそばに窓があるので、首を右に曲げると窓を通して外の景色が見えた。おじさんが何かを見せたいときには、坊やを抱っこして別な窓の所へ運んでくれた。

円盤の内部はかなり広くて、円形の床の直径は少なくとも十五メートル以上はあつた。内部は照明が暗くしてあ



るので、細部はよく見えない。

床のまん中に白い混濁した半透明の巨大な柱があつて、床から天井にかけて立っていた。どうやらアダムスキーの乗った金星の円盤の磁気柱と同じ種類のものらしい。ただしこちらの方は話から推測すると直径二メートルはあつたようだ。

内部が薄暗いので操縦席はどこにあるのか見当がつかなくなつたけれども、仕切られた壁のようなものがあつて、そこに別な部屋があるように思われた。ドアは見当たらない。

内部の色調は、床、壁、天井などがクリム色に統一されてた。少し黄色味を帯びた白色、いわば乳白色に近い感じという。いわゆるアイボリーだろ。

円盤の窓から鯨を目撃

——飛行中に目撃した光景についてはどうですか。

「そうじやな。飛びたつてから少しすると、夕方に沈んだはずの太陽がまた地平線から昇ってきました。太陽が二度も昇るのを見たのは初めてですから、とても驚きましたね。こんなことがあるのだろうかと思ひに思つたものです。」

円盤は西に向かつて飛んでいたのてしよう。行く途中はずっと太陽はうしろで輝いていたようです。

それから少し行くとまもなく海の上に出ました。海の上空を一時間ぐらひは飛んだてしようか。

そのうちにおじさんが「坊や、鯨が泳いでいるよ。下を見てごらん」と私を抱っこして丸窓の所までつれて行って見せてくれました。

見ると背い大海原が眼下に広がつて、その海の中を鯨の群れが背中を出して泳いでいるんです。すごいなあ!と、もうびっくりしました。なにせ生まれ初めて初めてこの目で生きた鯨を見たんですからねえ。

しかしかなり上空から目撃したので鯨も小さく見えました。私は鯨はもつと大きいものだと思ひ込んでいたので、意外に小さい姿が物足りないものですから、「おじさん、鯨はもつと大きいと思つていたのに、わりと小さいねえ。もつと大きいの見たいよ」と言うと、「よし、それじゃあもう少し下へ降りてみよう」とおじさんが言つて、円盤をスーッと海面のすぐ上まで降りしてくれました。

見ると、さつきは小さく見えていた鯨の群れがすぐ目の前に見えるんです。その大きいこと!とてつもなく大きくなって、背中から潮を吹きながら泳いでいるでしょう。雄大な姿を間近に見ることができて、それはもう大感激でした。

「うわーっ、おじさん、鯨って大きいなあ、すごいなあ!」と歓声をあげると、

おじさんも楽しんで笑つてうなずいていました。鯨は十頭近くいたようです。見ていた時間はよくわかりませんが、心ゆくまでゆっくり見物することができました。

飛行中はおじさんが外の景色をいろいろと説明してくれたことは覚えていますが、具体的にどんな内容だったかは記憶していません。これは私が外景や円盤内部の様子に気をとられていたからでしょう。」

アフリカで象の群れを見る

鯨をあとにして円盤はしばらく海上を飛び続けたあと、広大な砂漠地帯へ入りました。行けども行けども茶褐色の砂漠の上空を飛び続けるんです。そうするうちに、しばらくすると、おじさんが「坊や、象がいる所へ来たよ。見てごらん」と言つて窓の所へつれて行つてくれました。

アフリカへ来たのだと思います。上空から眺めると、はるか下を象の群れが歩いているのが小さく見えました。砂ぼこりをあげて動いているのが鯨のとくと同じように小さく見えるんです。十頭ぐらいいたようです。

そこでおじさんに向かって、「おじさん、象ももつと大きいと思つていたのに、わりと小さいねえ。もう少し大きいを見たいよ」と言うと、おじさんは「それじゃあもう少し下へ降りて

みよう」と言つて、ずつと降下しました。

するとすぐ真下にすごく大きな象が沢山群れをなして歩いてゆくのがパノラマのように見えるんです。大きな耳をバラバラ動かしたり、長い鼻をブラブラさせたりしている様子が手にとるように見えました。

生まれて初めて生きた象をこの目で見たものだから、すつかり宇頂天になり、「わーっ、おじさん、すごいなあ!」と大はしゃぎしていると、円盤はついに象の群れのすぐ近くに着陸したんです。

丸窓から外を見ると、象が目の前にいるので、とても感激してしまいました。無我夢中で外の光景に見入っていました。象のなかには私たちの円盤に気づいて、こちらを見ているのもいたようです。」

松山を出てからすでにかなりの時間が経過しているのだが、途中で食事などは出なかつたのだろうか。

これについて天中氏は、食事は出なかつたけれども、カップに入った飲み物を二、三度出してくれたと言う。

その味は極端なものではなく、ソフトな甘味があり、少し冷たくておいしかった。これもおじさんが渡してくれた。

女性のように見える人も、あるとき飲み物の入ったコップを出して、「はい、これ」と言つて渡してくれたが、



その言葉は日本語で、きれいな標準語だった。とても優しく親切な人である。

エジプトでスフィンクスとピラミッドを見学

続いて円盤はまたしばらく砂漠の上空を飛んで、今度はエジプトのピラミッドの上空にきた。上から見ると砂漠の中に道路みたいなものが通っているのが見える。

少ししてスフィンクスの顔を真正面より少し右に寄ったところから眺めた位置に円盤は停止した。かなり低く降りたらしい。

スフィンクスは少し暗く見えた。どうやら日陰（逆光）になっていたらしい。初めて見た少年には、砂の上に大きな犬の顔が首から上だけ乗っかっているような印象を与えた。現在のギザのスフィンクスは胴体が砂上に出ているので、この点を聞いてみると――
二年前に家内とエジプトへ行ったと

「坊やはアブラハムの子です」

「そのあととずっと砂漠の上空を飛び続けました。行けども行けども果てしなく砂漠の連続です。あまり砂漠が続くので子供心にも少し不安になったのを覚えています。

松山市郊外の元の出発地点に帰ったのは翌朝の五時少し前でした。これは

きに見たスフィンクスは胴体が砂の上に出ていたので、そのことを現地案内人に聞いてみたんです。すると昔は胴体が砂の中に埋もれていて、首だけが砂上に出ていたというんです。じゃから私が子供のときに円盤の窓から見た首だけのスフィンクスの姿は、当時としては正しかったわけです。

スフィンクスのすぐ向こう側に大きなピラミッドが見えました。それがギザの大ピラミッドだったわけです。

二年前に現場を訪れたとき、昔、円盤の窓から眺めた位置と全く同じ場所はないかと思っただけで、わがやりましたねえ！そこは小高い丘で、高さは四十ないし五十メートルくらいでしょうか。その丘の上から眺めると、私が円盤の丸窓から眺めたのと全く同じ位置であることがわかったんです。

円盤から見たときは西日がさしてピラミッドが赤味がかっていましたが、堪能するまでゆっくり見ることができました」

家に帰って時計を見るとちょうど五時だったのでわかるんです。

円盤が着陸してから、それまで着ていた白い衣のような服を脱がしてもらい、元の浴衣と下駄ばき姿にもどりました。おじさんも元の宣教師風の服に着替えていたようです。ほかの乗員は

もとのままの服装でした。

円盤から外へ出る直前になって、おじさんを含む乗員全員が私の方に向かい、直立不動の姿勢で横に一列に並びました。

身長二メートルもあるおじさんたちがずらっと並んだ光景は壮観でした。みな金髪のおカッパで、きれいな人ばかりですから——。それにあの女のような美しい人が列の一番右端に立っていました。

するとみんなを代表して、最初に私を案内してくれたおじさんが二、三歩前に進み出て、げげんな顔をして見上げている私に向かって次のように言うんです。

「坊や、あなたのお父さんはアブラハムです。あなたはアブラハムの子です。このことをよく覚えておきなさい」

私はアブラハムとは何のことやらさっぱりわかりませんでした。「アブラハムの子」、「自分のお父さんはアブラハム」と繰り返しながらしつかりと記憶にとどめました。

そのあと乗員たちと別れて、おじさんと二人で円盤の外へ出たんですが、なにやら階段みたいなものがあったのを覚えています。言葉は何も交わさずじまいて、おじさんにつれられて自宅へ向かったんです。おじさんは私の家のそばまで来ると、別れの仕事をしどこかへ行ってしまうましたね。

家では大騒ぎ

突然帰ってきたので家中大騒ぎになりました。実は私が昨夜家を抜け出て行方不明になったというので大騒ぎになっていったんです。近所にも応援を求めて探しているうちに部落中に噂が広がり、部落総出で付近一帯を捜索したんだそうです。

じゃが、どうしても見つからんの、早朝にいったん捜索を打ち切って、朝から再度探すことにし、それぞれ自宅にもどってひと休みしていたところへ私が帰ったものですから、「あれっ!? お前は一体どこへ行つとったんじや?」と言うんです。両親や兄姉も不思議がつて尋ねるので、一部始終を正直に話したんです。

鯨や象を見たことやエジプトへ行つたこと、アブラハムの子と言われたことなどを話しましたが、だれ一人として本気にしてくれませんが、「この土地から一步も外へ出たことのない者が、どうして鯨や象を見ることができるのか。そんなことができるわけがない」と寝ぼけて夢を見ていたにちがいない」と言つて、全然信じてくれないんです。

人々の不信の的となる

近所でも私が急に帰ってきたことが話題になって、あれほど探してもみつからなかった者が、どうして帰つてき

たのか、どこへ行つていたのかというんで、だいぶ聞かれましたね。

私は正直に昨夜の体験を話すとすば、だれも信じません。私にしてみれば、ふだん親しくしているおじさんにつれられて大きな乗り物に乗せてもらつて、各地を見てまわつたというのは、ごく普通の生活の続きぐらいにしか思つていないんです。当時は別な惑星から来た人間とは思っていませんから、日常生活の続きとして平気で話したわけです。

そんなわけですから他人がどうして自分の体験を信じないのかと思つて、むしろその方が不思議で仕方がなかつたです。こんな真実の出来事をどうして信じないのか」と。

そのうち部落中に私の噂が広がるにつれて、人々は私を「大ウソつき」とか「大寝ぼけ」とあざ笑つて、バカにするようになりました。

前にも話したように、かねてから毎年夏になると、夜みんなが寝静まつた頃、家の近くに來ていたおじさんとよく一緒に散歩していたものですか、家人は私が夜になると一人でそつと床を抜け出て外へ出るのを、「ひよつとしたら夢遊病のケがあるんじやないか」と言っていたようです。ですが今度の出来事も夢遊病で外出して寝とぼけて夢でも見ていたんだらうと思つていたようです。

油屋の子にされた

「おじさんから、坊やはアブラハムの子じゃと言われたんじや」といくら話しても、だれもピンとこないようでした。当時松山郊外ではキリスト教の影響は少なかつたもんで、聖書もあまり出まわつていないんです。ましてアブラハムの名前を知っている人はほとんどいないので、ピンとこないのも無理はなかつたと思います。

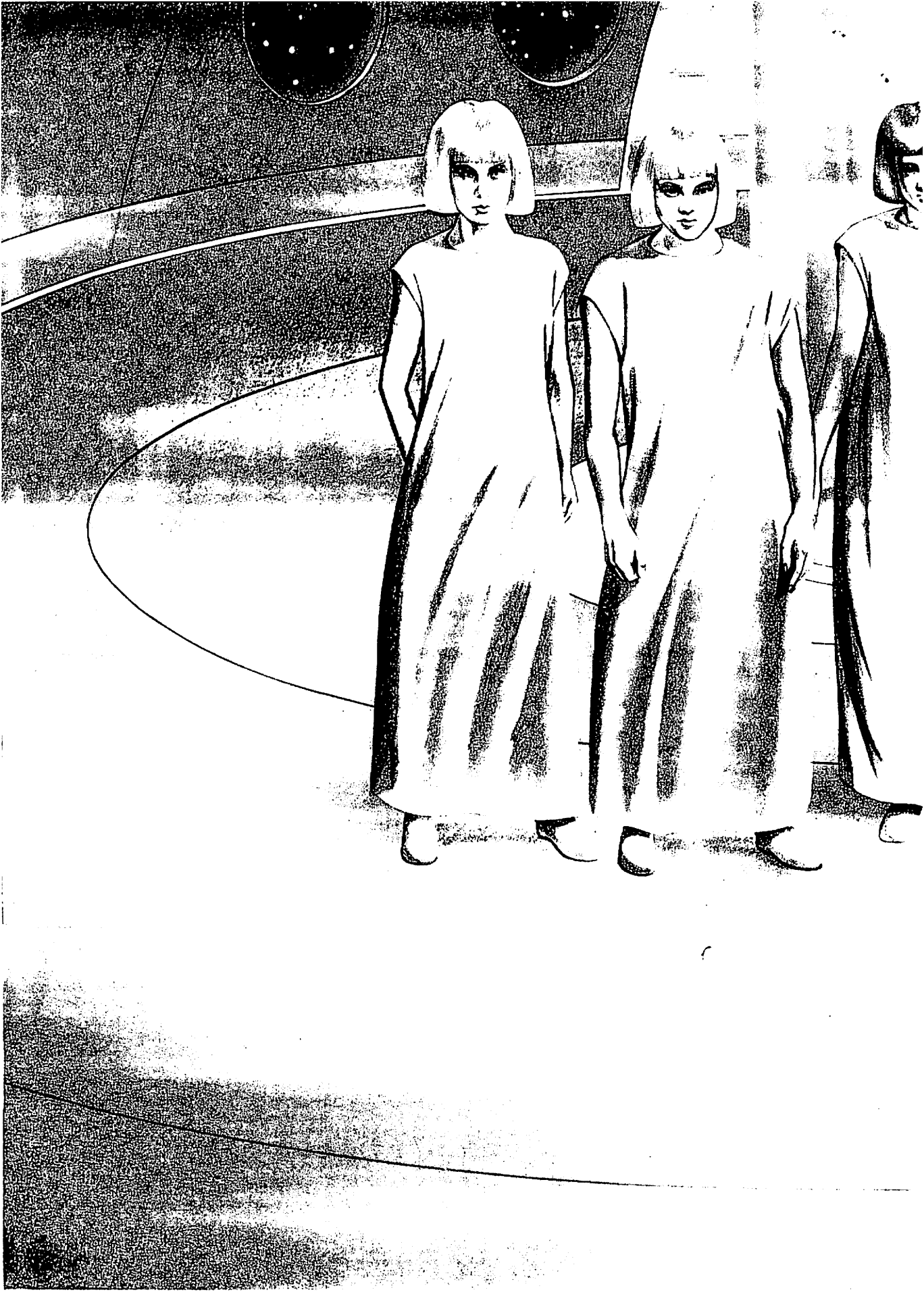
ちやうどその当時、隣の部落に油を売る店が一軒ありましたので、アブラハムと油屋の語呂が似ているところから、いつのまにか私を「油屋の子」と呼んであざ笑うようになりました。夜中に油屋へ行つていたということにされてしまったんです。隣の部落へ行つていたからあれほど探しても見つからなかつたんだというところでケリがついたようです」

信じたのはお寺の和尚さんだけ

——とんだ迷惑をこうむつたわけですね。子供心にもかなりの精神的な痛手を受けられたと思いますが。

「まあ、それでもひるまずに、体験を聞かれるたびに、「自分はアブラハムの子と言われたんじや」と堂々と話してきました。だれもが夢の中の話だらうぐらいに思つて、面白半分に聞いていたようです」





じやが、たった二人、近くのお寺の和尚さんだけは私の話の一部始終にじっくりと耳を傾けて聞いてくれた上、すべてを信じてくれました。だれも信じてくれなかったのに、ただ一人信じてくれたときは、本当に嬉しかったもです。

その和尚さんは私を大切に、かばってくれました。その和尚さんが亡くなる直前に私宛に色紙を書いてくれたんです。それには「天空を駆ける童、空に輝く大きな星」といったような不思議な詩がしたためてありました。私を賞揚するために死を間近にしながら書かれたものと思われれます。

またも円盤に乗る！

翌年の八月二日の夜、また円盤に乗りました。その日もやはり鎮守のお祭り、部落中が賑わってありました。

私はその日ずっと一年前の体験のことを思い出して、もう一度あの乗り物に乗せてもらえたらいいのになあと思っていました。

夜の九時頃、お祭りから帰って床に入っていると、またもあの儼しくて温かい気分がわいてくるんです。家の外であのおじさんが「坊や、外へ出ていらっしやい」と私を呼んでいるような気がするの、外へ出てみると、やっぱりおじさんが微笑して立っているんです。

それでおじさんと一緒にお墓の横の広場へ行くと、前回のと同じ型の円盤が着陸していて、中へ入れてくれました。

中へ入ると、最初のときの乗員は全部いました。あの女みたいな人もいましたね。

するとおじさんが「坊や、行きたいところへつれて行ってあげよう。どこへ行きたいかね？」と尋ねるんです。それでちょうど小学校の一年になったばかりですから、「ぼくの通っている小学校の上まで行ってみたいんじや」と言うので、「よし、それじやあ、つれて行ってあげよう」と言って、すぐに円盤は飛び上がって、少し離れた小学校の上空まで飛んで行ってくれました。

ここまでの距離は直線約一・五キロメートルです。お宮のそばに高い大きな木があるんです。小学校のそばの神社にも大きな木があるんですが、この二つの木のあいだを二、三回往復して飛んでくれましたですね。時間は十五分ぐらいです。

それからまた元の雑草が茂った広場に着陸して、例のおじさんにつれられて一緒に円盤を出たあと、家の近くまでどつたんです。いつものようにおじさんはどこかへ行ってしまうました——乗員と何か話しましたか？「いいえ、何も話しません。ただ別れるときに、おじさんが「坊や、また乗せてあげるからね」と言ったのを覚えて

います。しかしその後あのおじさんも円盤も姿を見せず、あれが最後の別れとなったようです」

本人の出生にまつわる秘話

天中氏の世界でも珍しい驚異的体験は大体に以上のおりだが、実は氏の出生の前後に不思議なことがあったという。それはこうだ。氏の母堂が伝えるところによると、氏が生まれる一週間前にどこからともなく、見たこともない旅のお坊さんが家へ訪ねてきた。そして母堂に言った。

「奥さん、まもなく男の子がお生まれになります。この子は将来必ず偉大な人物になります」

母堂は見知らぬお坊さんがなぜ臨月を知ってやってきたのか、不思議がついていた。

ところが天中氏が生まれてから七日目に、またそのお坊さんが姿を現して、「どうか私に坊っちゃんの名をさせて頂きたい」と言う。「このお名前になさいませ」と言って名前をつけたのが現在の天中氏の本名である。

母堂の話によると、そのお坊さんは編み笠をかぶり、墨染めの衣をまとった、とても背の高い、立派な顔だちのお坊さんだったという。

氏の波瀾に満ちた人生にはこれ以外にも不思議な出来事がいろいろあったようだが、多くを語りたくない。

しかしいつも何かの不可視の力に守られているという自覚は持ち続けてきたという。

二歳のときにもUFOを見た

天中氏の五、六歳時の円盤搭乗体験は大事件だが、実はそれ以前の二歳の頃に巨大なUFOを目撃したのを覚えているという。

昭和二年の四月、この年に高松から松山まで鉄道が開通したのを記念して松山大博覧会が開催された。少年は両親につれられて博覧会見物に行つたが、会場からふと道後温泉の後方の山の方角に目を向けると、山のすぐ上とところに、途方もなく巨大な銀色の飛行船のような物体がふんわりと浮いているのが見えた。

少年は不思議に思い、「何だろう？」と、しばらく見つめていたが、物体は一向に動く気配がない。いつまでもジッと浮かんでいる。それで少年は見るのをあきらめて、歩いて行った。これが人生におけるUFO目撃の最初である。

この頃から例の宣教師スタイルのおじさんが身近に姿を現し始めたという。そして夏になると家の外へ呼び出すのだ。この物体がただならぬものであり、おじさんも普通の人間でないことを、少年の心にそれとなく刻みつけようとしたのか、あるいはこの記憶が後世に

なって世に出ることを計算した上で、巨大なUFOとおじさんとの関連性を認識させようとしたのか、いずれにしてもこれは異星人側の意図によるものだろう。両者の出現が偶然の一致とは考えにくい。

まずUFOが出現し、それを目撃する。と同時に不思議な人物が身邊に現れるようになるというパターンは、本物のコンタクトイヤーにありそうなことだ。

十三年前にも巨大な円盤を目撃

ところが天中氏のUFOコンタクト体験は子供のときだけではない。戦後もときどき、かなり接近したUFOを目撃しているのだ。

今から十三年前、秋の夕方六時頃、車で重信川の下流にかかる中川原橋の近くを走っていると、西の空に金色と赤色に輝く物体が浮かんでいるのが見えた。

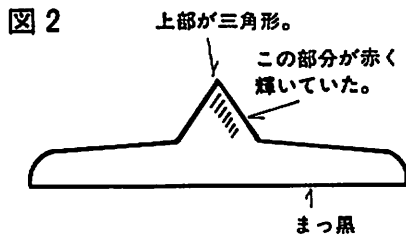
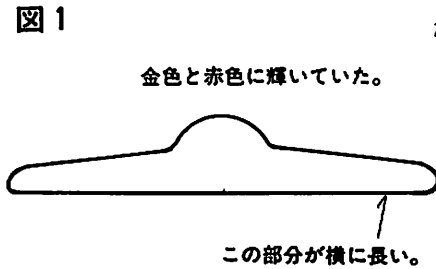
じつと見ていると、その物体はゆっくりと下に降りて、上空五百メートルぐらいの位置で約五分間停止した。それからまた降下して、近くの家屋の向こう側に着陸したという。目撃地点から着陸地点までの距離は一・五キロから二キロぐらいあった。

氏の自宅から見える二百メートル先の田んぼの中の二階建の家と比較して、物体の直径は少なくとも百メートル以

上はあった。その頃松山空港に発着していた全日空ボーイング727型機は二倍以上の大きさはあったという。これはアダムスキー型円盤ではなくて、円盤の外縁がかなり長く張り出している。全体が厚いセンペイのような型で、中央部にドームがあるというようなものだ(図1)。

この円盤がまだ空中に停止していたときに、天中氏は重信川の土手で見たのだが、そのとき学校帰りの中学生が二三人自転車を通りかかったため、UFOがいることを知らせてやると、一同はちよつとのあいだ見ただけでも関心がないとみえて、すぐ去って行った。

円盤は重信川の河口に近い河川敷に着陸した。天中氏はすぐに車に乗って現場へ急行したが、すでにその姿はなかった。



六年前にもまっ黒な円盤が出現

氏は六年前の五月にもまたUFOを目撃している。やはり重信川の下流でこのこと、朝十時頃、車で松山市余戸のあたりを走っていると、突然フロントガラスの前方の一面まっ黒い雲の中からピカピカ光る巨大な円盤が降下してきた。そして高度百メートルぐらいの位置で停止したという。

これには氏も驚いた。直径五十メートルほどの物体はまっ黒で、上部が三角型のとがったような構造になっていた。その部分だけが赤く輝いていた。下部は普通の円盤の形をした珍しい型の円盤であった(図2)。

見かけ上の大きさは十三年前のものとは同じだが、今度は距離が近いので、実質的な大きさは十三年前の方が大きいという。

この円盤も空中に停止したので、写真を撮ろうと思つて、車の中に置いたカメラを急いで取り出して、レンズを向けたときにはすでに円盤の姿は消えていた。

子供のときの体験ばかりでなく、わずか六年前まで二度も円盤を目撃したというのは、スペース・ピープルが今なお天中氏の動向に注目し、ひそかに見守っていることの証左であろう。

真実の体験と不信との板ばさみ

それにしても、これだけの珍しい体験をもつた天中氏の生長期は、さぞかし苦惱に満ちたものだったのだろう。不思議な体験を一人胸に秘めておくのは辛いことだろうし、人に話せば笑われる――。

「小学校へ入ってから後も私の噂はついでまわりましたですね。級友からも大ウソつき。大寝ぼけ。油屋の子」と言われて、からかわれました。しいには私も聞き直つて「ほうよ、ほうよ、油屋の子よ、それがどうしたんじや」と、なかばヤケソ気分て言い返しておりました。

私は普通の体験をしたわけじゃが、周囲はどうしても認めようとはしなかつたんです。当時の一般常識とあまりにかけ離れていたから、寝とばけて夢を見ていたと思えなかつたんでしようね。そんなことがあるわけがない

と思うのも無理はありません。

そういうわけで社会の常識と自分の体験との間の板ばさみになって相当に悩み苦しんだものです。人間というものは自分の行為を何らかのかたちで正当化しないと落ち着かないんです。私もその頃は人からバカにされるし、やりきれない毎日が続くもんじゃないから、かなりまいりました、なんとかこの苦しみから抜け出したいと思い、すべてを忘れるように努力しました。そして旧制中学に入る頃にはすっかり普通の学生になっておりました。

戦後 UFO 問題を知って 勇気づけられた

そうするうちに戦後になって、各地で UFO なるものが出現するようになって、私も大いに関心をもつようになり、それと各地の目撃例などを調べてゆくうちに、どうも自分が子供の頃に乗った物体は、いわゆる UFO にはあるまいか、あのおじさんや乗員たちは地球人ではなくて、別の惑星から来た異星人ではないだろうかと思いはじめたわけです。

そうこうするうちに海外から UFO に乗ったという体験が伝わってくるようになり、その記事を読むうちに、どうも自分の体験とよく似ているものじやから、「これは確かに自分が乗ったのは UFO だったんだ」と確信が持てるようになり、自分でも納得できて、

私は救われたわけです。

その後、忘れていた自分の体験を思い出して、まじめな関心をもつ人々に伝えてあげれば、地球以外の惑星に人間が住んでいることや、UFO 実在の有力な証拠としてお役に立てるんじゃないかと思うようになり、二年ぐらい前から関心のありそうな人を選んで三、四名の人に話しているんです。でもほとんど信じてくれんです。面白半分というか半信半疑のようです」

日本 GAP を購^たえる

ここで GAP の話になった。久保田先生の三十年にわたる奮闘の状況を紹介すると、天中氏は感嘆した。

「あなたにお会いするまでは日本 GAP というグループがあつて、地球外文明の問題で真剣に活動していることは全く知りませんでした。久保田八郎という方が長年啓蒙活動をしてこられたことも初めて知りました。

こういう特殊な分野の活動というものは、やっているといろいろな障害や妨害があるもので、長く続けるのは大変なことなんじやが、それを三十年も続けるのは並大抵のことではない。おそろく口では言えないほどの苦勞があたりたことじやろう。大変な業績ですね。よほどの信念というか意志の力がないとやれない仕事だと思います。——天中さんにはそれがわかりやす

か。

「わかりやすとも。私にはよくわかる。日本でそんな活動を三十年も続けている人がいたとは驚きじやなあ。私はその久保田八郎という人の努力に心からお礼を申し上げたい気持ちです。これまでの長年の勞をねぎらいたいと思います」

事実のみを語る

最後に質問してみた。

「円盤内部で『あなたはアブラハムの子です』と異星人から告げられたことを現在どのように受け止めていらっしゃいますか。

「その当時はなにぶん五歳の子供ですから、その意味がよく理解できませんでしたが、戦中戦後の大混乱期をすぎた

円盤乗員たちの高貴な同胞愛

——八時間近くも円盤に乗っておられて、内部で受けた印象や乗員の態度などで最も記憶に残っているのは何ですか。

「円盤の内部は温かくて調和した雰囲気にあふれていました。搭乗員はみな優しい人ばかりです。私がそこから感じたのは、同胞愛、友愛のフィーリングでしたね。

私たちは最も心を許し合い信頼し合っている人のそばにいますと、平安と

落ち着きをとりのどしてから、アブラ

ハムという人のことを調べてみますと、とても偉い人だということがわかって驚きました。自分がこんな偉い人の子供であつたとは信じられない思いますが、これは円盤の中でおじさんが発言したことです。否定できないんです。

私が四千年前にパレスティナで活躍したアブラハムの子であつたかどうかについて、私個人の意見を述べることは差し控えましょう。

ただ私が子供のときに円盤に二度も乗せてもらったこと、機内でアブラハムの子と告げられたこと、やさしいおじさんに抱っこしてもらって可愛がってもらったことなど、事実のみをお伝えして、あとは読者のみなさんの判断にゆだねたいと思います」

くつろぎ、幸福感などを味わいますが、それと全く同じ、一団性¹のフィーリングが円盤と乗員たちに満ちあふれていました。全体がまるで、一大家族のような感じがしたものです。

この、同胞愛、友愛、一大家族の雰囲気はその後の私の人格形成に大きな影響を及ぼしました。中学生の頃に体得した、自然との一団性¹、宇宙の同胞愛²の生き方は、子供のとときの体験が基礎になったものです。

アブラハム

アブラハムは旧約聖書の創世記12章から25章にかけて出てくる人物で、イスラエル人の信仰の父といわれる偉大な族長である。ノアの洪水で名高いノアにはセム、ハム、セベテという3人の子があったが、そのうちセム系の子孫のテラという人を父に生まれたアブラム（アブラハム）は、父一族と共にカナン（現在のパレスティナ）に移住するためカルデアのウル（現在のイラク南部に位置する古代バビロニアの古都）を出た。これは前1950年頃のウル第3王朝末期からイシン・ラルサ期にかけての頃と考えられる。カナンに着いたアブラハムに神が「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」と宣言したために、後世ユダヤ人のパレスティナ領有意識と選民思想が生じた。アブラハムには常に神が現れて指導し、百歳のときに妻サラとのあいだに息子イサクが生まれた。妻のメイドであったエジプト人のハガルにも子を生ませてイシマエルと名付けたが、この母子は後に追放された。ある日神はアブラハムの信仰心を試そうとして、子のイサクを殺していけにえにせよと命じた。そこで彼はモリア山の岩の上でイサクを横にならせて殺そうとしたとき、神はその厚い信仰心に感動して殺すのをやめさせた。この伝説の岩は今もエルサレム旧市内の岩のドームの中に残っている。アブラハムは175歳で没し、息子のイサクが跡を継ぎ、やはり神の祝福の下に大いに栄えて、イスラエル民族の発展の基礎を築き、180歳で世を去った。



▲重信川のほとりに立つ天中童氏。

あの体験以後、私の人生も当時の日本の運命と同じで、波乱万丈に富んだものでした。戦時中は私も青年学徒として、自分を育ててくれた日本国家への愛国の情を抑えがたいものがあり、なんとか勝たせたいと願ったもので、戦後になって世の中が安定するにつれて、国家への関心はさらに地球全体への関心と広がりました。そして今では地球を含む宇宙全体に関心を広げてその一体性にまで私の視野が広がっているのです。日本全体の、地球全体の、そして宇宙全体の生命あるすべてのものが同胞愛のもとに一大家族として共に助け合って生きてゆけたらどんなに素晴らしいだろうかと思えます。

我欲を捨てて他人の幸福を願う行為は、それ自体がとても楽しくて嬉しいものです。人を幸せにしてあげたい、人を助けてあげたいという願いのもとに実際にそのような行為をしながら今日まで生きてきました。そうした一体性のフィーリングを忘れず、行為にも反映されてゆくならば、私が地球人であるとしても、あの円盤の中で会ったおじさんたちの雰囲気を出すことは十分に可能だと思えます。自然とたわむれる童のような自由無碍で新鮮な生き方。人々の幸福を願い、自分の持てる才能を生かしながら人々を助け、喜びを与える人生を送りたいと思っております」

ここにもアダムスキーの伝えたスベ

ース・ビーブルの宇宙的な同胞愛が語られている。このフィーリングこそまさに人類の進化と幸福へのキーなのであろう。それがアメリカではアダムスキーを通じて、日本では天中氏を通じて私たちに示されたのである。このいずれも真実の出来事であり、この世で最も高貴な思想を伝える劇的な事件である。

なお天中氏は筆者の取材に快く応じられたばかりでなく、幼児の頃の写真も提供され、全身撮影も許可されたが、事情あつて後姿のみを写した。

◀天中少年の二歳の頃。



また日本GAPをよく理解され、この発展に絶大な期待をかけておられる。筆者が後日贈ったアダムスキー全集を愛読し、GAP会員として本誌も購読しておられるが、本人の住所氏名その他個人的な件に関する問い合わせには一切応じかねるので、その旨了承されたい。真実を伝えて、あとは読者の判断にゆだねるのみである。

掲載写真 筆者撮影
イラスト 木原康彦

ブラジル人教授の 円盤搭乗事件

今を去る二十八年前、ブラジルの大
学教授が海岸の砂浜に着陸した円盤に
乗せられて大気圏外まで飛ぶという驚
異的事件が発生していた。

このことは一九五八年、ブラジルG
APの機関誌第4号にポルトガル語で
掲載されたが、昨年イギリスの有名な
UFO専門誌フライイング・ソーサー
・レビューに英文全訳が掲げられて大
反響をまき起こした。英文記事の題は
「アダムスキーにたいする注目にあた
いする確証か？」となっており、同誌
編集陣がアダムスキー問題に重大な関
心を寄せていることを示唆している。

体験者ジョアン・デ・フレイタス・
ギマランエス博士は、サンパウロと思
われる大都市の大学のカトリック法学
部における古代ローマ法の教授で弁護
士である。

なおかつてブラジルGAPの主宰者
であったウォルター・ビュラー博士
は今も健在で、一般UFO問題の啓蒙
活動に専念している。

一九五七年（昭和三十二年）の冷た
い季節のある夕方——たぶん六月か七
月上旬頃（訳注）ブラジル南部はこの
頃が寒冷期）、ギマランエス教授はサン
セバスチアンという海に沿った町で法
律関係の仕事についていた。この町は
サンパウロ州の大西洋岸にあるサント
スから少し北東へ行った所にある。
すでに食事をすませた彼は、砂浜へ

ぶらぶらと散歩に出かけた。時刻は夜
の九時十分か十五分頃だ。

空は雲に覆われてどんよりとしてい
る。あたりにベンチがないので砂の上
に座り込んで両膝をかかえたまま暗い
海を見つめていた。

突然彼は、サンセバスチアンの真向
かいにあるイリヤペラ島の方角の海の
色が変わりだして、少し明るくなった
のに気づいた。すると海水が空中に噴
出した。まるで鯨が潮を吹いているか
のようなのだ。

このときまでに彼は一種の、高くふ
くらんだ、型の飛行物体にも気づいて
いた。砂浜に向かって来るらしい。

砂浜に着くと物体は数個の球体から
成る一種の、着陸装置を出した。注
意深く見ていると、それは確かに球体
であって、普通の浮き輪ではないこと
がわかった。

「アダムスキー型」乗員が接近

すると二人の男が物体から飛び降り
て彼の方へやってきた。二人とも完全
な人間だ。少なくとも外観はそのよう
に見える。海岸にいたのは自分だけだ
から恐ろしくなってきた。それで立ち
上がったが、恐怖心が起こるにもかか
わらずその場に立ったまま人間たちを
持った。

相手は背が高く、身長一メートル八十
センチを越えるらしい。長い金髪を垂

らし、淡い色の皮膚が見え、まゆ毛も
ある。

二人とも上下続きの緑色の服を着て
いるが、胸、手首、足首の所はびつた
りと締まっている。二人の目は薄皮で
覆やかだ。

教授はもちろんポルトガル語で相手
に尋ねた（訳注）ブラジルの国語はポ
ルトガル語）。

「あなたの方の乗物に何か具合の悪いこ
とがあるんですか？ それとも、だれ
かを探しているんですか？」

相手は何も答えない。

そこで教授はフランス語、英語、イ
タリア語で尋ねたが、やはり答えない。

乗船をすすめられる

続いて教授の心中に一つの印象が起
こってきた。「この連中はあの乗物に
乗らないかとすすめているんだな」

だがどうしてこんな考えが起こった
のかはわからない。ただ彼らがすすめ
ていると感じただけのことだ。しかも
相手はテレパシーを用いていたらしい
と、教授は後に言っている。

また、自分は科学者ではないので、
テレパシーのような問題に関心を持っ
たこともないと言い、相手二人は話を
するときにハッキリと発音する才能が
あることもあとでわかったという。

大体、教授はそれまで、空飛ぶ円盤
というようなものに全く関心はなかつ



たし、忙しい人間なので、実際に円盤については何も知らなかったのだ。

だが相手の乗物は、いわゆる「空飛ぶ円盤」と思われたし、どうも相手が「乗らないか」とすすめているように感じられるので、ひとつ自分であの機械の内部を見てやろうという抵抗しがたい欲求が起こってきた。

相手の一人が円盤の方向へ歩き出したので、ギマランエスもそのあとを歩き、二人目の男が彼のあとに続く。

円盤に到着してから先頭の男が身軽に梯子へとび上がったが、ギマランエスは両手を用いて登る必要があった。

円盤の入口の所に三人目の男が立っている。一同が中へ入ると、その男も加わって、ドアはしまった。

いま教授は明るく照明されたコンパートメント（仕切られた部屋）の中にいる。ほかにいくつかのコンパートメントがあり、それらも明るく照明してあるのがわかった。

円盤の飛行と壮麗な天空

円盤が空中に上昇するにつれて、教授は丸窓（複数）に水が流れているのに気づいた。まるで雨が降っているみたいだ。

彼は尋ねた。

「雨ですか？」

雨ではないと、乗員の一人がテレパシーで答えた。その水は円盤の一部の

回転運動で生じたのだと言う。船体の周囲に放射線を透過するチューブがめぐらしてある。これは船体のどの部分でも半真空状態にする特性をもっているのだと、その乗員が言った。丸窓からのぞきながら教授は周囲いっばいに広がった広大なまっ黒い空域を見た。その中には星々が驚くほどに明るく輝いている。

すると今度は星々が一様にいくつもの大きな群れをなしているように見える空域へ来た。この星々は比類なく壮麗に輝いている。そのあと星の少ない暗く見える別な空域が続く。

それから円盤はスミレ色の大気圏を通り抜けて、そのあととつと濃いスミレ色の別な類似の空域へ入った。ここは最も素暗らしく輝いている所だ。ここを通過するときに教授は船体が激しく揺れるのを感じて恐怖の色をあらわした。これを見た乗員の一人がテレパシーで言った。

大気圏外へ出る

円盤の飛行中に教授は彼らに尋ねた。「あなた方はどこから来たのですか？」しかしだれも答ええない。なぜ自分たちの正体を明かそうとしないのか、その理由がさっぱりわからない。

円盤はすでに地球の大気圏外にいる

と聞いて彼はひどく驚いた。

このコンパートメントの中に、非常に感度のよい三本の針のついた円形の装置があるのに気がついた。この針はずつと揺れていたが、地球の大気圏を脱出したときに激しく震動し始めた。乗員の一人が説明する。

「この宇宙船は宇宙空間に存在する磁気力(複数)から起こる効果(複数)によって推進するのです」

大宇宙空間に見える明るく輝く天体群はさまざまな色を帯びており、虹色の雲状のものが矢のように通過する。このすべてが言葉に尽くせないほどの壮絶な光景をつくり上げている。

円盤が地球へ帰ったとき、教授は自分の時計が止まっているのに気づいた。したがってこの宇宙旅行がどれほど続いたかはわからないが、約三十分ないし四十分ぐらいだったと彼は考えている。

ホテルに帰ってから教授はこの異様な体験について、あらゆる人に大声で話したくなってきた。

地球人は野蠻人

彼の結論によると、こうだ。こうした円盤の乗員は地球の住民を調査する仕事に従事している。そして人類をおびやかしている危険について地球人に警告したがつているのだという。

地球人に関する彼自身の意見として、

地球人の振舞いは野蠻人のそれに近いという。だれもが善良な人間として生まれるのに、惑星地球固有の諸条件のために悪い人間になる。このようにして、たとえば現在一連の科学的実験が無思慮な軽薄なやり方で行われており、その結果、原爆の無差別な爆発によって大気中のイオン化を生じさせたばかりか、危険な放射線を防ぐ大気の諸層を破壊した。こんな恐ろしい道具の使用にこれ以上の注意が払われなければ、人類はみな爆発の結果で苦しむことになるだろう。

体験したことを語るのはむづかしい

ギマランエス教授は語る。彼は十四カ月前に異様な体験をしたけれども(訳注)この記事は体験から十四カ月後に書かれたもの、今まで事件の詳細を妻以外のだれにも話さなかった。

しかし約六カ月前に彼は三人の人間に話した。それはサンパウロの判事、アルベルト・フランコ博士と、サンパウロの元弁護士、ニルソン博士(?)という人である。

これが事の起こりであった。ある日、弁護士会の昼食会の席上で、ギマランエス教授はアルミニウムのパネルが目についた。このために彼は、空飛ぶ円盤について冗談めいた話をしたのである。このとき円盤に関するかなりな話をしたので、その話しぶりからして

仲間のなかにはギマランエス教授が円盤問題についてもっと何かを知っているのではないかと考えた人もあったが、彼はそれ以上語らなかつた。

その後彼は別な友人のリンコルン・フェリシアノ博士に秘密を打ち明けた。この人は彼の話に大変な関心を持ったので、それを別な人に伝えた。こうして話が広まり、記事が掲載されたのである。

ギマランエス教授によると、噂が広まって以来、彼は話を聞きたいという人たちに周囲をかこまれてしまったので、落ち着かないという。誠意のある愉快な人たちが、このことで彼は難儀な立場におちいった。実際に発生したことを正確に説明するのは極端にむづかしいからだ。

彼は自分で目撃した状況を述べるのに、次のようなたとえ話をする。

「たとえば何かの旅の途中で一人の男が作業中の空気ドリルを見たとき、旅から帰って、彼は、空気ドリルについて関心はあるけれども全く何も知らない人たちに説明しようとしませんが、その正確な説明をするのが不可能なこととは明白です。同様に私の体験を述べるときも全く不可能です。私が体験した事は、自分の知識をはるかに超えているからです」

円盤に乗った人は他にもいる

しかし彼は話し続けているうちに言った。あのような機械(円盤)に乗って飛んだ地球人は彼が最初ではない。というわけは、新聞が彼の話を洩らしたあと、円盤問題を扱った本に関する情報を与えられたし、こうした本のかには彼自身に似た体験の記事が掲載されていたからである。

飛行中に体の不快を感じたかと思われ、円盤が離陸したときと降下したときにある程度の不快を感じたと言う。手足に冷たい感じが起こって大変不快になったが、これは生来の神経症のためだと答えた。

異星人を裏切りたくない

ギマランエス教授によると、一九五七年八月十二日にふたたびその円盤の乗員と会う約束がされていたというが、彼はそれを守らなかった。

どのようにして約束がされたのかと聞かれて、彼は次のように説明した。飛行中に乗員が十二の星座を含む黄道帯を見せた。一個の輪が年を示し、数字の8を十二回繰り返したので、八月という印象を受けた。

二度目の会見の約束を妨げたのは何かという質問にたいして、彼は、そこへ行くのが不可能になりそうだったからだと言っている。噂が流れたために多数の群集もそこへ行くよう準備していたらしい。すると大騒ぎになるだろ

うという。

もう一つの理由として彼の家族に死人が出たこともある。その上、ブラジル空軍の一将校が彼に接近して、約束を守るなど要求した。空軍は数機のジェット戦闘機に出動の準備をさせていたので、そのために重大な事件が発生したかもしれない。もし戦闘機が円盤に発砲したならば、教授側の裏切り行為のように見えるかもしれないのだ。

教授としては、あれほどに親切で素敵だった異星人たちに不愉快な状況を引き起こすようになっては不誠実だということになりかねない。自分が好奇心のある人間だとは思わなければならない。思慮分別が好奇心に打ち勝つたのだ。

最後に要点を述べると、教授は自分の体験の始めから終わりまで充分に意識していたし、自分が幻覚の犠牲者でないこともよくわかっていた。また理想的な精神を持つ傾向があることも認めているが、実践的であるとも主張している。

他の円盤搭乗事件との類似点

以下はフライイング・ソーサー・レビュー(誌編者の注)

まず第一に、小型円盤のキャビンにそって円形に並んでいる座席の記述は、教授の事件より五年前(一九五二年)にアダムスキーによって与えられた説

明と完全に一致している。乗員たちの大体の外観もアダムスキーが伝えたものと酷似している。

第二に、一九五四年十月二十一日午後四時四十五分、イングランド、シュリーベリー付近のラントンで、ジェニー・レステンバーグ夫人と二人の息子が、アルミニウム色の円盤が飛行を停止し、同家の屋根の上で短時間滞空したのを見たという。透明なパネルを通して三人は二人の「男」を見たが、それは明るい皮膚をもち、金髪が肩まで垂れており、額はすごく広かった。

二人の「男」は透明なヘルメットとスキー服に似た青緑色の服を着けていた。彼らの目に関する夫人の説明は、ギマランエス事件に関連して特に興味深い。

彼女によると、円盤が傾いた角度で空中に停止していたとき、二人の乗員は地上の光景を見渡しているようだった。きびしい顔つきだが、不親切そうではなく、むしろ、ほとんど悲しそうな、同情にみちた顔だったという。

アダムスキーは誤っていないかった

われわれは重大な事実と思われる事件にもう一度注意をひかれる必要があるのだろうか。一九五〇年代の初期に多くの「コンタクトティー」が、見たところ全くの人間または人間に近いタイプのもので、実際に人間らしく振舞っ

た人たちと会ったと報告している事実にだ！ こうした報告類はもう全く人ってこないようだ。

読者はこれにたいするさまざまの可能な解釈や、この世界で発生していると思われる出来事にたいするさまざまの可能な筋書きなどについて、自分で考え直してみるとよい。これらが意味するものは重大であるが、いまここでそれを詳細に論じる余地はない。

しかしわれわれには強調できることがある。第一に、アダムスキーが主張していることは、誤り、として証明されたことがないという点だ。第二に、レステンバーグ夫人には今でも会えるということだ。彼女は先般もUFOに関するBBCテレビ番組に出演したが、その話には全然変化はなかった。彼女が数百万の視聴者に完全な誠実さを印象づけたことはわれわれにわかっている。

もし友好的かつ賢明なタイプのアダムスキー型異星人が存在するとして、しかも最近この地方で(イングランドで)見られなかったとすれば、この意味は重大である。われわれはそれについて大いに考えるほうがよい。時が来れば、この問題に関して論議すべき事が多くあるのだ。

英フライイング・ソーサー・レビュー誌より

翻訳 久保田八郎
イラスト 木原康彦

◎質疑応答◎

ジョージ・アダムスキー
久保田 八郎 訳
〈連載第一回〉

この質疑応答集は一九五七、八年にアダムスキーが各国GAPリーダーに配布したもので、ポケット判五分冊から成っている。訳者は事情により多年秘蔵していたが、今回より連載することにした。内容は今も新鮮である。文中の「注」は訳者による。

問(1) あなたは「宇宙船の内部」(アダムスキー全集「宇宙からの訪問者」の第二部)を出して以来、別な著書を出しましたか。

答 いいえ。ある書物を出す仕事を始めましたが、科学的プログラム(注)スペース・プログラムのことを遂行するために、この書を出すのをやめるようにとブラザーズ(注)友好的な異星人)から忠告を受けました。「宇宙船の内部」にこそ多くの貴重な情報が含まれていると彼らは言っています。私たちが右の書の中に述べられている知恵の言葉に従って生きるように努力するならば、この書は世の中の役に立つでしょう。

地球人が互いに他人にたいする考え方の習慣や行為をすすんで変えようとして、より大きな理解と思ひやりを示すようになるまでは、これ以上の情報

はほとんど与えられません。

(注)右の回答で「ある書物」とあるが、これは原稿の完成をみただけでついに出版されず、アダムスキーの幻の書物となったものを意味する。訳者はかつて海外の某所でこの英文原稿を読んだことがあるけれども、たしかに「宇宙からの訪問者」が圧倒的にすぐれていることを知った。右の幻の書物の中に「金星ではロボットを多用して人間の労力を大幅に削減している」という記事があったのが印象に残っている。

宇宙の諸法則に関する成長とそれを確実な足がかりにしたことよって、彼らは(ブラザーズは)私たちよりももっと幸せな生き方ができるようなったのですが、この生き方を他人に押しつけてはいけないというふうに理解しています。各人は自分でこのことを理解する必要があります。しかもこれは個々の問題です。一州、一国家、一世界は、そこに住む人々と同じように強く幸せてあげればよいのです。

各人は他にたいする影響力の中心であり、本人が接するあらゆる物に影響を与えます。したがって、各人が自身にたいして真実な人間になることを学びながら、自分の生き方を改善するにつれて、本人はそれに従って同胞に役立つのです。まったく重要なのは日常の生き方です！各人は自分でこのことをなさねばなりません。

問(2) ゾ連の人工衛星スプートニクに

ついてスペース・ブラザーズからの情報をお持ちですか。

答 ありません。ゾ連の人工衛星が打ち上げられて以来、現在まで(一九五七年十月十八日まで)私はスペース・ビープル(注)別な惑星から来た人々と会っていません。この次に会ったときには、この問題で質問してみましよう。このあとの問(3)に関して彼らがどんな情報を与えるかも含めてみます。

しかし一つ知っている事があります。その小さな人工衛星のあとを追いかけていると最初に報道され、しかも今は衛星を導いているといわれるあの。砲弾型物体は(別な惑星の)宇宙船です！この問題で流された情報を調べてみれば、一個以上の、砲弾型物体がゾ連の人工衛星と共に軌道を回っていることがわかるでしょう。

この前スペース・ビープルと会ったとき、どこかの国が地球を回る軌道にうまく開発物を乗せる可能性について話し合いました。そのとき彼らが言うには、どこの国がこのようなプロジェクトに成功しても、綿密に観察するつもりだということです。それが純粹に科学的なものであることがわかれば彼らは放置するそうです。これが彼らの現在の方針のようです。

問(3) 地球人が初めて人工衛星を打ち上げるのをなぜスペース・ビープルは援助しなかったのですか。

答 私に与えられた情報によりますと

——これはゾ連から直接にきたものではなく、ゾ連と連結している他の国の人たちからよせられた情報ですが——ゾ連には多くのUFO目撃や着陸事件があったということです。私が知り得た限りでは、ある国(複数)はUFOにむかって発砲せよと自国の空軍に指示を与えています。いずれの国にせよ自分たちが撃っている相手や、自分たちが無視している情報の与え手からの援助は期待できません。

忘れてならないのは、宇宙から来る訪問者は差別というものを知らず、特定の階級の人だけを支持しないということです。彼らは政治や宗教には関係なく、全人類を兄弟姉妹とみなしています。彼らの関心は全体的に、人間にあるのです。この地球にせよ広大な宇宙のどこにせよ、どこで、人間を見いだしても、このことは変わりません。しかし断言しますが、彼らは敵意をもつ人を支持しません。

問(4) スペース・ビープルはなぜ地球へ来るのですか。

答 この特殊な時期にあればどの数で彼らが出現するのは、主として科学的な調査研究のためです。今までにほとんどすべての人が、地球の自転軸に発生している変化について、何かを聞いています。これはあらゆる惑星に一定のサイクルで発生する自然現象です。彼らは(スペース・ビープルは)この変化を綿密に観察していますが、そ

れは太陽系内のどこかの変化は太陽系全体にある程度の影響を与えるからです。

また彼らの現在の地球訪問は地球観測年と一致することにも気づかれるでしょう。この観測年中はあらゆる国の一流の科学者が、地球とその諸活動を一生懸命に研究します(注一 一九五七年七月一日から一九五八年十二月三十一日までの十八カ月間実施された)。

しかも私たちは地球の大気圏内を飛ぶ彼らの宇宙船によって、宇宙に隣人の存在することが知らされつつあるのですが、彼らが実在するという証拠を前にしながらも、大多数の科学者は他の惑星群に人間が住んでいることに気づきませんでした。



▲若き日のアダムスキー

私たち地球人が知識によってわが太陽系の家族の一員になるのが、彼らの心からの願いなのです。

問(5) スペース・ピープルは私たちに似ているのですか。

答 そのとおりです! 地球の聖書の教えによれば、地球の人間は創造主の姿に似せて創られたとあります。これは真実で、しかもこれと同じ創造主が宇宙とその中に含まれる万物の父というのですから、多くの館のある父の家。の中の別な部屋にいる父の子供たちも、私たちと同様ではないでしょうか。

地球ではさまざまな大きさや皮膚の色の間がいますが、これと同じ状態は別な惑星群にも存在するのです。地

地人は皮膚の色によって人種別に分類しますが、他の惑星群の居住者は、父自身のさまざまなに変化した似姿を生じさせた父の知恵にたいして、父を賛美しています。外見によって評価される人はおらず、万人が内部に創造主の生命を宿すものとして崇敬されます。

スペース・ピープルは私たちと同様の人間です。ただ彼らは自分自身と、私たちがすべてが住人である宇宙についてより深い理解を持っているのです。私たちも宇宙旅行をマスターすることや学ぶならば、私たちの宇宙の概念は無限に広がるでしょう。

問(6) スペース・ピープルは地球の特殊な形態の社会を支持していますか。

答 支持していません。このような支持は地球の分割の習慣に従ったものです。彼らはいかなる種類の誤った分割をも認めません。彼らは、生命は永遠であり、あらゆる人は一定の運命を遂行するために生まれていることを理解しています。各人は人生の行路を旅しながら自分のレッスンを学ばねばなりません。他人がこれから学ばねばならぬレッスンをすでにマスターしている人も多くいますが、万人の前には初めも終わりのない永遠の道が延びています。したがって万人は等しく尊敬されるのです。だから彼らは地球の特殊な形態の社会をより好みもしなければ非難もしません。

問(7) 一九五〇年代の初期に聞いたような UFO の墜落事件を、なぜこの頃聞かないのですか。

答 初期の墜落事件は、地球のエアークンデーションング装置に似たプロセスによって、地球の大気圏内の放射性物質が、UFO の中に取り入れられたために発生したのです。乗員は病気になる、船体のコントロールを失って、その結果、致命的な墜落となったわけです。多数のこうした災禍が発生したのち、他の UFO の乗員たちは諸条件の調査や、こんな災難を避ける方法を探求し始めました。現在彼らはこれに成功しています。

彼らはある小型の装置を完成させています。宇宙船が地球の大気圏内を飛行しているときに、各乗員は各自これを身につけるのです。宇宙船内の空気を清浄化するためにもっと大型の同様な装置が使用されています。スペース・ピープルが地球へ来るときには、地球の大気中ばかりでなく食物や水などにも含まれている放射性物質に耐えられるように、保護用としてこの装置を必ず用います。

問(8) 彼らはなぜ私たちにこの装置を与えてくれないのですか。

答 その装置は彼らの惑星から産出する鉱物や元素類をもって開発されたもので、したがって使用者と調和した波動を含んでいます。地球人用の保護装置は地球の元素や鉱物によって作る必

要があります。これは地球人が肉体の波動を地球に合わせるためです。

問(9) スペース・ピープルはなぜ地球人よりもはるかに進歩しているのですか。

答 彼らが私に語ったところによりまずと、遠い大昔(注)この部分の原文は millions of years ago となっているが、この場合の millions of は「数百万の」ではなく「多数の、無数の」という明確な数字を含まない表現なので「遠い大昔」とした。したがって、いつ頃のことかはわからない、この太陽系内の他の惑星群の住民は、互いを

一惑星という家族の兄弟姉妹として尊敬し始め、万人をただ一つの無限の創造主の子として認めています。分裂もなく、万人が共に調和して働きながら、その努力を建設的な研究と成長の方に傾注することができました。その結果、彼らは自然界の諸法則と自然界の働きを十分に学んでいます。この知識のために彼らは自然の力(複数)のいくつかの利用法を支配している諸法則を理解することができましたし、それによって彼らは自分たちの惑星の機能に合わせて宇宙船を建造することができました。そしてついに自分たちの世界の限界を超えて旅することが可能になったのです。

一方、地球人類の歴史は分裂と個人の願望に満ちていました。建設よりも破壊が人間の習慣になっています。今

日私たちはこうしたりやり方の報いとして病氣、苦しみ、無知などを生じています。

私たちはこの惑星地球を人間のものとみなして、各人がわずかな土地を自分のものだと主張していますが、一方、宇宙の隣人たちは自分たちの惑星を創造主のものだと自覚しています。したがって一大家族として彼らは産物を平等に分配しているのです。

私たちは分裂のもとで互いに見知らぬ人間として生きていますが、彼らは同胞愛のもとで平和と調和の中に生きています。

問(10) 彼らは神を信じていますか。

答 彼らは各人のあらゆる想念、あらゆる行為において創造主を賛美しています。地球人は信仰を告白し、多くの人が敬虔な信心の言葉をとまえますが、内心では、知恵を持つ大師たちから何世紀にもわたって伝えられてきた普遍的な諸法則を生かすことの実用性を疑っています。

キリスト教の旧新約聖書で、すべての偉大な指導者の教えて、私たちは愛の掟を見いだします。「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」と。

この掟の本当の意味を充分に理解するには、私たちは「隣人」という言葉の概念を広げる必要があります。隣人というのは隣家に住む人だけではなく、世界のあらゆる人、私たちの太陽系内の他の惑星群に住むあらゆる人、広大

無辺の宇宙に住むあらゆる人を意味します。

宇宙とその全体はこうした調和の法則に従った完全なタイミングのもとに働いています。このことを理解して宇宙の隣人たちは平和、健康、生命の真の目的の深い理解などを見いだしてきたのです。したがって、私たちが自身の心中に恐怖、憎悪、食欲などを抱くならば、神にたいする信仰を生かしていないこととなります。神にたいする真の信仰とは生き方を意味するのです。

問(11) 彼らの家庭生活はわれわれの生活に似ていますか。

答 似ています。彼らの親密な家庭生活は私たちのそれに大変よく似ています。子供は地球と同様に妊まれて生まれます。生活はもつと楽しいのですが、これはあらゆる人が共通の利益のために働いて生きているからです。

彼らは働き、学び、遊び、私たちと同じような関心事に加わったりします。好みの点で言えば彼らは菜食者ですが、厳密にはそうだともいえません。ときには肉も食べますが、屠殺用に家畜を飼うことはしません。

彼らの家は家族の必要に応じて大きさがまちまちです。あらゆる家庭には家事仕事の労役を除くために画期的な装置類がそなえてあります(注)これは主としてロボットを意味する)。生活にたいする強い関心をもって彼らは地域社会の集会やスポーツの競技会

などを樂しみます。言いかえれば、彼らの生活は私たちの標準からみて、普通なのです。地球の多くの家族につきまといっている病根のような嫉妬深い所有欲はすべて克服しています。

問(12) スペース・ピープルは地球のわれわれよりも異なる次元に住んでいる不可視なエーテル体または靈魂なのですか。

答 違います! エーテル体ではありません! 彼らはあなたや私と同様に普通の肉体を持つ人間です。エーテル。という言葉は混乱を起こします。

自然の万物は有形無形にせよみなエーテル体なのです。理解し得る最高の現象は不可視のガス類であって、そこから万物が生じています。可視的な物体は、このいわゆるエーテルまたはガスのより粗い現れにすぎません。

たとえば、私たちはラジオやテレビのメッセージはエーテル波で受信機に入ってくると言います。しかしこの波動はわれわれの耳に聞こえ、目に見えるようになる前に周波数が下げられねばなりません。したがって、エーテル。という言葉が正しく理解されるならば、それは靈魂または肉体的ない実体とは関係がないことがわかるはずですが、

宇宙それ自体は不可視なものです。しかしその内部には宇宙のエーテル波によって活性化された、さまざまの密度をもつ自然の天体が動いています。しかしこのエーテル波をつたわってき

た人々(スペース・ビープル)により
ますと、宇宙の中にはエーテル体人間
は存在しないということです。あらゆる
人間は私たちの地球とほとんど同じ
固形の土でできた惑星に住んでいるの
です。(注1右のエーテル体人間は靈
人という意味で用いられたらしい)。

問(10) 彼らの宇宙船(UFO)は、な
ぜときどきわれわれの眼前で消えるよ
うに見えるのですか。

答 これには二つの理由があります。
一つは遠近の変化で、このために突然
消滅するかのように見せかけます。ち
ょうど地球の飛行機がある角度でター
ンすると、眼前で消えるように見える
のと同じです。もう一つは、非常に高
頻度または高速で動く物体を人間の肉
眼でとらえることはできないという理
由によりです。

扇風機が非常によい例になります。
電源を切って回転羽根が静止すると、
羽根ははつきりと見えますが、スター
トさせてスピードをゆっくりと加速し
ますと、最初は羽根がぼやけて見えま
すが、次に混合してしまいます。高速
で回転すると扇風機をすかして向こう
が見えてきます。それでも羽根は静止
しているときに視界をさえぎった固い
羽根なのです。ただスピードによって
羽根が、消えている。かのような錯覚
を起こさせたにすぎません。宇宙船
(UFO)の場合も急に加速すると同じ
ことが起こるのです。

問(11) 彼らはテレパシーによって地球
人と意志伝達をやっていますか。

答 はい、やっています。しかし宇宙
的な性質を帯びたテレパシー通信と、
地球でよく受信されて知られている心
霊的な、メッセージとは決定的な相
違があります。地球人が自分自身や自
分の心の動きをよく知るようになるま
では、宇宙的な源泉から来る情報と、
地球を取り巻く想念帯から来る情報と
を区別するのはむづかしいでしょう。
長い時代にわたる人間の居住と思考に
より、大自然界から出る放射物と相ま
つて、ほとんどの人が気づく以上には
るかに実際の波動が確立されてしま
した。したがって、こうした想念帯と、
現実のテレパシー通信をともしう放射
物とを混合しないように、極端な注意
を払う必要があります。

問(12) スペース・ビープルから発信さ
れ受信されたと思われる多くのテレ
パシクなメッセージをどのように
説明しますか。われわれ地球人の波動
を高めよと言ったり、未来の出来事の
恐るべき警告を発したりしていますが

答 私に言わせれば、これも地球を取
り巻く想念帯に霊媒が同調した結果で
す。スペース・ビープルからのテレパ
シクな通信の受信ではありません。
そのメッセージの与え手が自分の名前
や地位のような身分証明を用いている
ことにあなたは気づくでしょう。宇宙

船の内部(「アダムスキー全集第一巻
『宇宙からの訪問者第二部』)に述べて
あるように、スペース・ビープルは地
位や名前を用いて自分の正体を明かす
ことはしません。

また彼らは私たちの未来を予言しま
せん。彼らはある一定の方向に続けら
れる活動から起こる筋の立った結果を
私たちに語るかもしれないませんが、その
時期を決して言いません。彼らは無数
の諸条件が干渉して出来事のコースを
変え得ることを知っています。だから
私は何かのメッセージ、特に未来の予
告、を含むメッセージ類については、
まじめに疑うことをいつもすすめてい
るのです。

問(13) 地球と別な惑星の人々とのあい
だに真実の連絡が確立されているので
すか。

答 そうです。地球人との連絡のほと
んどは個人的なコンタクトを通じてな
されてきました。これは私たちが自分
自身や心の動きをほとんど理解してい
ないからです。過去数年間、多くの国
で個人的な会見が行われました。こう
したコンタクトに関する情報が今や少
しずつ大衆に洩らされています。以前
はこんな体験を持つ人々は、事実を洩
らすのを恐れていました。知識を持た
ず信じていない大衆によって、疑惑と
嘲笑が彼らに投げかけられたからです。
ここで警告の言葉の一つ。現在、宇
宙人のようなふりをして地球の街路を

歩いている多くのペテン師がいます！
問(14) なぜスペース・ビープルは大衆
して着陸しないのですか。

答 それは地球の大多数の人がこのよ
うな出来事を受け入れる準備がまだで
きていないからです。人々は当然のこ
とながら自分たちの理解していないこ
とを恐れますし、そのために起こるパ
ニックが大破壊をもたらすでしょう。
忘れてならないのは、数百万の人々は
別な惑星から来る訪問者の存在を認め
るのに、他の数百万の人々はそれにつ
いて聞いたこともないか、または嘲笑
し続けているという事実です。そして、
スペース・ビープルの正体や地球へ来
る目的に関する理解がなければ、彼ら
の突然の出現は確かに恐怖すべきもの
となるでしょう。私たちは自分の尺度
で他人を計りますし、一惑星として私
たちはまだ好戦的です。したがって、
より以上に進歩した人類が友好的に地
球へ来つつあり、それは地球を征服す
るためではないということは、ある人
々にとつては理解しがたいようです。

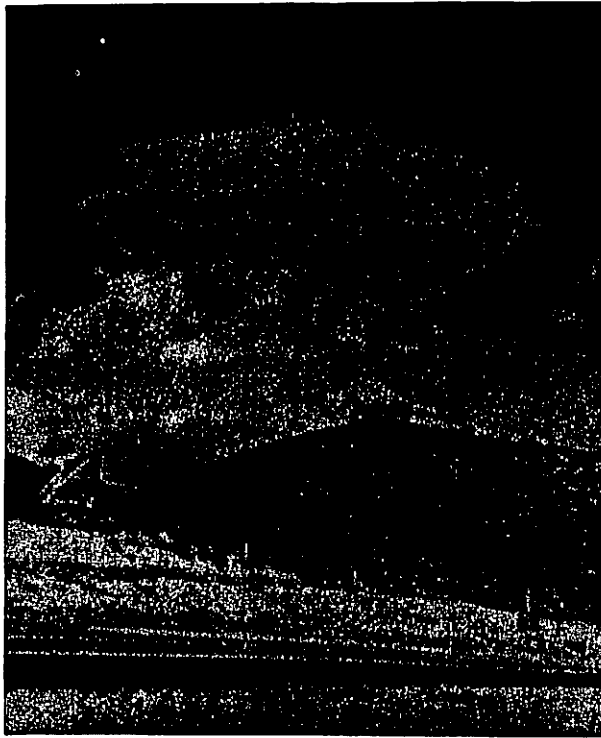
世界の各国政府と宗教の指導者の両
方から公式な認定が出れば、大衆にこ
の事実を伝えることができるでしょう。
アメリカの「マキニユリ」誌一九五七
年七月号の百二十五頁に掲載された記
事の引用は、こうした問題とともにこ
の事実を見事に述べています。
「現代の無頓着なタイプの神学者たち
は、このような出来事の精神的な意味

にたいして張り合うことができるのか？
または政治的意味において、国際関係
が惑星間関係になる場合に、何が起こ
ろうとするのか？ 社会的経済的意味
で、いかなる破壊を期待したらよいの
か？」

地球の宗教界の指導者や政府関係者
がこうした疑問に答えるならば、スペ
ース・ビーブルの承認が得られるてし
よう。

問18 別な惑星では交換手段としてお
金を用いるのですか。

答 用いません。彼らの交換手段は、
必需品とサトビスの交換システムです。



●円盤か雲か

1974年12月30日、米カリフォルニア州マウントシヤスタ市で撮影されたもの。約600mかなたの物体にしては巨大すぎるし、雲にしては形がととのいすぎている。

決されます。

これは私が理解していることですが、
法的なコントロールの必要はほとんど
ありません。立派に行われる仕事にた
いして十分な承認と報いが与えられま
すので、地球の貨幣システムがもたら
すような誘惑は完全に排除されていま
す。

また彼らは次のように語っています。
その代議員団に選ばれるのはこの上な
い名譽と考えられています。というわ
けは、このことは「創造主の子供たち
に奉仕することによって創造主に奉仕
すること」の特権を、その選ばれた人
々に与えるからです。

問20 敵対的な宇宙人や怪物などに
いて多くの事が語られてきました。こ
れについて何かをご存知ですか。

答 この質問そのものが多くの人の心
に恐怖をもたらしていますが、これは
別な惑星から来る訪問者を政府が認め
ようとしないうちに責任がありま
す。しかしちよつと深く考えてみれば
だれにとつてもこの質問の答が出てく
るはずで、宇宙旅行ができるほどの
進歩した科学知識があるというのです
から、もし彼らが敵対的だとすれば、
とつきの昔に地球を征服できたてはな
いでしょうか。しかし彼らはそんな動
きを全く示していません。

忘れてならないのは、いかなる科学
的発見といえども両刃の剣だということ
とです。私たちの核分裂が全人類の平

和な進歩に用いられる一方、文明の絶
滅にも用いられ得るように、彼らの宇
宙の電磁力の知識もそれがやれるてし
よう。彼らが放出してきたパワーをも
つてすれば、私たちの最大の爆弾すら
をも七月四日（独立記念日）に哀れな
爆竹程度に見せかけてしまおうてし
よう。

こうした事実は彼らの「敵意」に関
する疑問に正しく答えるものではあり
ません。私の知る限り、地球人にた
いするスペース・ビーブル側の敵意を
示す事件が証明されたことはありません。

報道された怪物については、高空飛
行用に重装備したジェット戦闘機のバ
イロットの一人をあなたは見たことが
あります。彼は飛行機について全然
聞いたことのない人にとっては、恐ろ
しい姿に見えるでしょう。あなたには
怪物の目撃報告はUFOの不思議さ
と接近、見なれないユニフォームの出
現などで引き起こされたひどい恐怖の
結果だったことがわかんと思えます。
私たちは創造主の似姿であると考え
る一方、別な惑星の人間だといつて創
造主の名でもって彼らを奇形扱いにす
るのは、創造主にたいする冒瀆であり
神聖さを汚すものです。創造の物語は
宇宙的なもので、私たちの小さな惑星
地球だけに限定されたものではありません。
(第一分冊完。以下次号)



日本GAP神奈川支部代表・大崎孝典氏は、八月にエルモ16mm映写機をGAP本部に寄贈された。中古ながら立派に作動するので月例会などで活用したい。

「GAP」の週刊紙「レキオ」(週刊レキオ社発行、部数二十五万部)の今年九月六日付第23号に、日本GAP沖繩支部代表・新里義雄氏とのインタビュー記事が大きく掲載された。「UFO」は友朋か——一四七七年、辺戸のアフリ岳に出現!?と題して一面から三面まで報じられた十五世紀の沖繩アフリ岳上空に出現したUFOの驚異的出現事件は、本誌85号にも新里義雄執筆の記事が掲載されたが、今度は雄大なアフリ岳のカラー写真を一面に載せた迫力ある報道になっている。本土の新聞や週刊紙にありがちなからかい半分な文ではなく、まじめそのものの取り上げ方は大変好ましい。

「GAP」の週刊紙「レキオ」(週刊レキオ社発行、部数二十五万部)の今年九月六日付第23号に、日本GAP沖繩支部代表・新里義雄氏とのインタビュー記事が大きく掲載された。「UFO」は友朋か——一四七七年、辺戸のアフリ岳に出現!?と題して一面から三面まで報じられた十五世紀の沖繩アフリ岳上空に出現したUFOの驚異的出現事件は、本誌85号にも新里義雄執筆の記事が掲載されたが、今度は雄大なアフリ岳のカラー写真を一面に載せた迫力ある報道になっている。本土の新聞や週刊紙にありがちなからかい半分な文ではなく、まじめそのものの取り上げ方は大変好ましい。

「GAP」の週刊紙「レキオ」(週刊レキオ社発行、部数二十五万部)の今年九月六日付第23号に、日本GAP沖繩支部代表・新里義雄氏とのインタビュー記事が大きく掲載された。「UFO」は友朋か——一四七七年、辺戸のアフリ岳に出現!?と題して一面から三面まで報じられた十五世紀の沖繩アフリ岳上空に出現したUFOの驚異的出現事件は、本誌85号にも新里義雄執筆の記事が掲載されたが、今度は雄大なアフリ岳のカラー写真を一面に載せた迫力ある報道になっている。本土の新聞や週刊紙にありがちなからかい半分な文ではなく、まじめそのものの取り上げ方は大変好ましい。

「GAP」の週刊紙「レキオ」(週刊レキオ社発行、部数二十五万部)の今年九月六日付第23号に、日本GAP沖繩支部代表・新里義雄氏とのインタビュー記事が大きく掲載された。「UFO」は友朋か——一四七七年、辺戸のアフリ岳に出現!?と題して一面から三面まで報じられた十五世紀の沖繩アフリ岳上空に出現したUFOの驚異的出現事件は、本誌85号にも新里義雄執筆の記事が掲載されたが、今度は雄大なアフリ岳のカラー写真を一面に載せた迫力ある報道になっている。本土の新聞や週刊紙にありがちなからかい半分な文ではなく、まじめそのものの取り上げ方は大変好ましい。

「GAP」の週刊紙「レキオ」(週刊レキオ社発行、部数二十五万部)の今年九月六日付第23号に、日本GAP沖繩支部代表・新里義雄氏とのインタビュー記事が大きく掲載された。「UFO」は友朋か——一四七七年、辺戸のアフリ岳に出現!?と題して一面から三面まで報じられた十五世紀の沖繩アフリ岳上空に出現したUFOの驚異的出現事件は、本誌85号にも新里義雄執筆の記事が掲載されたが、今度は雄大なアフリ岳のカラー写真を一面に載せた迫力ある報道になっている。本土の新聞や週刊紙にありがちなからかい半分な文ではなく、まじめそのものの取り上げ方は大変好ましい。

ないので、店を変えて他の二店に各十冊ずつ卸したところ、平積みになされて表紙がよく見えたためか88号はいずれも完売したという。売れ行きは雑誌の置き方にもよるようだ。

「GAP」の活動を多年側面支援された神戸の直道会会長・巽直道先生が去る九月二十四日、講演先の神奈川県で老衰のため急逝された。行年八十三歳。先生は信念の力によって難病治療その他の奇跡を実現させる方法により無数の病人や悩める人を救済した偉大な指導者であり、編者とも昵懇の間柄であった。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

「GAP」の活動を多年側面支援された神戸の直道会会長・巽直道先生が去る九月二十四日、講演先の神奈川県で老衰のため急逝された。行年八十三歳。先生は信念の力によって難病治療その他の奇跡を実現させる方法により無数の病人や悩める人を救済した偉大な指導者であり、編者とも昵懇の間柄であった。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

定。今年度に劣らぬ充実した案晴らしい総会にするべく企画の中。

「GAP」の活動を多年側面支援された神戸の直道会会長・巽直道先生が去る九月二十四日、講演先の神奈川県で老衰のため急逝された。行年八十三歳。先生は信念の力によって難病治療その他の奇跡を実現させる方法により無数の病人や悩める人を救済した偉大な指導者であり、編者とも昵懇の間柄であった。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

した。これもまじめな編集と見事なレイアウトで異彩を放っている。

「GAP」の活動を多年側面支援された神戸の直道会会長・巽直道先生が去る九月二十四日、講演先の神奈川県で老衰のため急逝された。行年八十三歳。先生は信念の力によって難病治療その他の奇跡を実現させる方法により無数の病人や悩める人を救済した偉大な指導者であり、編者とも昵懇の間柄であった。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

今年度地方支部大会は山形・仙台合同支部大会(十月二十日・米沢市)、群馬支部大会(十一月三日・太田市)、福岡支部大会(十一月十七日・福岡市)、名古屋支部大会(十一月二十四日・名古屋市)が開催される。本号39頁の予告を参照の上、多数参加されたい。

太陽系の各惑星に知的生物が存在!

米空軍士官学校の秘密文書が洩らす

一九六八年に米空軍士官学校物理学科が出した「宇宙科学序説」によると、その第三十三章「未確認飛行物体」の中に次のような説明がある。

「一九五七年七月二十四日、千島列島のソ連対空高射部隊はUFO（複数）に発砲した。同列島のソ連対空全部隊がUFOを攻撃したが、どれも命中しなかった。UFO群は輝く物体で、すんいスピードで飛んだ。米軍もUFO群に発砲した。

われわれにとって最も刺激的な説は、UFOは物質の物体であり、人間が操縦している。か、または地球人にとって未知の人間が遠隔操縦するものいずれかという点である。この考え方を裏づける証拠がある。

最も普通に伝えられている異星人は身長約一メートル、頭は丸く——ヘルメットか?——両腕は膝またはその下まで伸びており、銀色の宇宙服か上下続きの服を着ている。その他の異星人は基本的には地球人と同じ姿に見えるが、もつと他の異星人になると特に横に長い目と非常に薄い唇のついた口を持つっている。

「なぜ彼らは地球人にコンタクトしないのか?」という質問にはきわめて容

易に答えられる。

(1)われわれ地球人は高度な社会的、心理学的研究の対象なのか、しれない。このような研究においては、だれしもテスト目標の環境を乱さないのが普通である。

(2)人間はだれしも蜂の集団とコンタクトはしない。地球の人間も異星人にとつては蟻のようなものなのかもしれない。たとえば動物園は見に行くのは面白いが、だれしもトカゲの集団とコンタクトしないのと同じ。

(3)このようなコンタクトは、普通の人間とは異なる知覚のレベルですてに発生しているのかもしれない。われわれ一般人はこのようなレベルにおけるコミュニケーションにたいしてまだ感覚的でないのだ。

以上が異星人が地球人とコンタクトしない少数の理由である。

〈結論〉

入手し得る情報からみて、UFO現象は過去五万年間、完全に地球的な現象で発生したと思われる。名前の知れている目撃者たちの大多数は信頼できると、彼らは容易に説明のつく自

然現象を見たのだが、このことは異星人が地球へ来ているか、または少なくとも異星人がコントロールしているUFOが地球へ来ている可能性を残している。

データが示すところによると、少なくとも三ないし四種類の異なるグループの異星人が存在する。たぶん発達段階が異なるのだろう。

このことはわれわれの太陽系内の惑星群の大多数に知的生物が存在するか、または他の太陽系の惑星群が地球にたいして驚くほど強い関心を持っていることを意味している。

UFO問題の解決は、十分な資金と有能な科学者を持つ大きなグループの長期にわたる熱意のある努力によって得られるかもしれない。

編者注||以上の情報は今年七月、アメリカの有名なUFO研究団体APRO（空中現象調査機関）から日本GAP宛に送られた資料の一部。傍点は編者による。アダムスキー没後三年にして、権威ある米空軍士官学校の物理学科教授陣がこのような文書を残していたことに驚くほかはない。米空軍がUFO問題の真相を隠蔽しているという説はこの一事でも明白である。APROは一九八五年七月をもって解散した。その理由は主宰者の一人、ローレンゼン夫人の病気のためだとある。しかし夫君のジム・ローレンゼン氏はきわめ

て親切に多量の資料を日本GAP宛に送ってよこされた。

英フライイング・ソーサー・レビュー誌一九八五年八月発行
第三十巻六号の〈巻頭言〉より

残念な話

フライイング・ソーサー・レビュー（空飛ぶ円盤評論）誌の読者（複数）がときどき投書してくる。

金星から来た、虫歯もない美男子で写真写りのよい日焼けした紳士たちが、彼らの宇宙船からとび降りて、宇宙の驚異について語ったり、邪悪なアメリカ人たちに關する恐ろしい警告を発したりするような、快い刺激に満ちたアダムスキー的またはメンジールのなすてきなコンタクト例をなぜ掲載しないのかというのだ。

たいへん悲しいことだが、こうした報告はもうこちらへ入ってこないのがある。本誌（フライイング・ソーサー・レビュー誌）が入手するのは、最近の各号で示すとおり他の種類の事件ばかりである。

実を言うと、われわれ（編集陣）も緑色の皮膚をした生物、小鬼、悪鬼、ネズミのような顔をした宇宙人などにはすつかり飽きりがきており、もつと社会的に受け入れられるような報告を切望しているのだ。それで、もしこのよ

うな事件を読者が存知ならば、その報告が本誌宛に送られるようにご配慮を願いたい。

しかし——それについて考えるということになる——かりに大気圏外の居住者たちが地球人と親しくなろうとしていると言われているようにそうしたがっているとするれば、彼らがUFO研究者たちとコンタクトすることにずいぶん控え目であるらしいのはどういふわけだろう。

「いや、彼らはわれわれの希望を満たそうとして躍起になっていたのかもしれないのだ」と読者は思っていたかもしれない。それならなぜ彼らはコンタクトしないのか。

実際には大気圏外から来る、訪問者たちは、コンタクトしたがっているようなふりをしていっているのではなく、訪問者でもないということになるのだろうか。

われわれのような人間はUFOについてすでに多くを知りすぎているのだと彼ら(異星人)は考えているのか。彼らに関する話が、UFO狂でなくUFOの本など読んだこともない普通のありふれた一般人に流れてゆくほうがより安全だと彼らは思っているのだろうか。

読者のなかの少数は——その内の人から来た投書をもまなく掲載するが——親愛なる金星人を持っていてもダメだろうと確信している。なぜなら全

地球人類は悪魔みだだからというのだ。

信じようと思えばいいと勝手だが、一般大衆が全くの魔精だというのは正しいと思うけれども、右の意見はわれわれの見解とは全く異なるのである。

モハメッド(イスラム教の創始者)または最も高貴なコーランでさえも、魔精のすべてが悪玉だとは言っていない。それどころかイスラムでは、そのなかには善玉もあり、それらは時が来れば最後にはわれわれと共にパラダイス行きになるかもしれないと、はっきり述べている。

そこでお願い。金星人または善玉の魔精のみなさん。なにとぞあなたの方の一幕をもう一度上演して下さい！ 私たちは、反対派には全くうんざりしているのです。プログラム(企画)の変化を熱望しているのです。

編者注||きわめて英国風のユーモラスな文章であるが、その底にはアダムスキー的な異星人のコンタクト例を切望している気持ち脈打っており、オペケのような宇宙人の出現例にうんざりしている編集者の偽らざる感情が明確に表現されている。

ただし真実のスペース・ビーブルがなぜ地球のUFO研究者たちにコンタクトしないかという理由については、フライイング・ソーサー・レビニュー誌の編集者は全く理解していないように

思われる。コンタクトの条件としては、ただUFOにたいする関心があるというだけではダメなのであって、もっとはるかに深遠な問題——すなわち宇宙的カルマ(宿命)の有無にかかわる問題があると考えられるのだ。それは究極的には形而上の問題であらう。

デンマークGAP主幹イブ・ラウルンド氏より日本GAP宛の連絡
 (一九八五年八月二十八日付)

日本GAP発行の「UFOコンタクト」日本語版と英文版の両方を有難くいただきました。両方とも大変立派で興味深いものです。私はいま英文版に掲載されたタカマツの円盤降下事件の記事をちょうどデンマーク語に訳したところです。これはデンマーク語版機関誌「UFOコンタクト」に掲載するためです。あなたの転載許可に感謝します。もちろんデンマークGAP機関誌の記事を日本語に翻訳転載されてもかまいません。

あなたが日本語版「UFOコンタクト」の各記事のタイトルを英訳して下さったことはとても助かります。特に二十頁に掲載されているあなたの執筆された「アダムスキー問題の真実性と宇宙哲学実践法」はかなり長い記事ですが、これが読めたらよいかなら思っています。もしできることなら

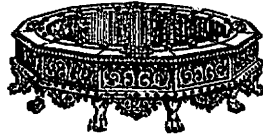
この記事の英訳を送って下されば大変嬉しく思います。(後略)

編者注||以上は七月にデンマークGAPのラウルンド氏宛日本GAP機関誌の日英両語版を送ったことについて丁重な礼状の一部分。他にも当方について詳細な依頼事項が述べてある。高松事件はデンマークGAP機関誌のデンマーク語版と英語版の両方に掲載するらしい。大反響が期待される。

デンマークGAPの機関誌は「UFOコンタクト」といい、日本GAPのそれは「UFOコンタクト」なものでまぎらわしいが、前者はUFOに関心ある人々とのコンタクトを意味し、後者はUFOやその乗員とのコンタクトを意味する。したがって機関誌の性格も異なる。前者は各国の政治家にUFO問題をとり上げるように訴えた公開書簡、UFO遭遇例、科学記事などが主体をなしており、宇宙哲学の研究実践に関する記事はほとんど見られない。菊判二十四頁、年二回発行されている。表紙裏には「この機関誌はジョージ・アダムスキー氏に捧げられてきた」と記して、GAP活動の目的が詳細に述べてある。



地球の哲学と宇宙哲学の相違



(1)

松原眞弓

地球の思想史を考えると、忘れてならないのは地球以外の異星に住む人々たちからさまざまな思想的援助があったことです。

この援助はそのときそのときの地球の文化や技術の発達程度に応じてなされてきたようです。このうち、もっとも有名で、決定的にこの地球の人々に影響を与えたのはイエス・キリストの思想であり教えたと思われま

す。キリストの教えは後世宗教という形をとり、よきにつけ悪しきにつけ、ここ二千年間、地球の思想に大きな影響を与えてきました。

偉大な思想はゆがめられる

思想というものは、初めの新鮮な教えが人々に受けつがれ、伝えられ、年代がたつにつれて人々によってゆがめられ、手あかがついてくるものです。キリスト教も二千年に近い年月を経て、そのよい面だけではなく、いろいろの手あかによってわるい面もめだつて来たようです。

ほとんど同じ教えでも、何千年に一度かはその時代の言葉によってフレッシュ・アップされねばなりません。受けつがれることによって、ゆがめられ、誤解され、間違ってしまった教えは、

新しい言葉で、新しい人によって、新しい時代と新しい技術にマッチした新たな衣装をまといつて現れねばならないのです。

そのような教えとして、今日、われわれはキリスト教の他に、G・アダムスキーがもたらした宇宙哲学をこの地球上で見いだすことができます。

(編注)「こゝで宇宙哲学というのはアダムスキー著『宇宙哲学』、『生命の科学』、『テレパシー開発法』に述べてある思想を総称したもので、アダムスキー哲学ともいう)

G・アダムスキーが新しく地球にもたらした宇宙哲学は、金星やその他の惑星の人々からもたらされた古く、かつ新しい哲学です。それが古いというのは、この哲学が宇宙の人々の何億年にもわたる思考や技術にうらづけられたものといわれているからです。また新しいといわれるのは、G・アダムスキーが現代の地球の人々のために、現代の言葉でその哲学を表現したからです。

G・アダムスキーがもたらしたこの宇宙哲学はちょうどキリストが生きていた当時の人々にとってキリストの教えがそうであったごとく、いまだ、なんだか頼りなく、なんとなく他の哲学と同等で、さほど力のない教えのように思えることでしょう。

キリストが生きているとき、居合わ

せた人々のうち、何人の人が、キリストの教えがその後二千年にわたって人類を支配した思想となったことを予想したでしょうか？

今日、G・アダムスキーのもたらした宇宙哲学が今後の地球の人類にどれほどの影響力をもつようになるか？ それをはつきり、今、予想できる人がいるでしょうか？

迷路をさまよう地球の哲学

地球にはここ何百年間に限って考えても多くの哲学者がいました。彼らは古いキリスト教に影響され、キリストの教えにたどられていた手あかのついた教えに對立し、あるいはそれを受けつぎ、あるいは乗り越えようとして、さまざまな主張をくりかえしています。しかしそこには、さまざまなつまづきがあるようです。それは出口のない迷路のようなものです。近世に入って以来今日まで地球の哲学者たちは、意識という導きの糸をたどって、迷路から脱出しようとしてきました。しかし、いまだわれわれ地球の哲学は迷路のなかにさまよっているようです。

今日、われわれはこの迷路のなかで、意識という導きの糸だけではなく、一つの出口を指し示す、ほのかな明りを見いだすことができただけです。

それこそ、G・アダムスキーがもたらした宇宙哲学なのです。



▲デカルト

そこで地球の哲学と宇宙の哲学とがどれほど似かよっており、どれほど違っているかをここで問題にしたいと思えます。

最近の地球哲学を問題にして、その迷路に陥っているところはどこののか、どうすればその出口のない迷路から脱出できるのか等々の問題解決を宇宙哲学によって求めてみたいのです。

このように地球哲学と宇宙哲学を比較することによって、いかに宇宙哲学はすぐれた思想であるかが、ますます理解できるようになるでしょう。

一方、今日、G・アダムスキの体

意識重視の哲学に於いて

近代の地球の哲学はデカルトによって始まると人々は見ています。

デカルトは何を考えたか

デカルトは十七世紀前半のフランスの哲学者で有名な「我思う、ゆえに、我あり」を哲学の基礎である真理とした哲学者です。

験はあまりにも驚異的なので、それに不信を抱く人が残念なことに相当数存在していますが、彼のもたらした宇宙哲学が地球の哲学を凌駕する哲学であることを知ることによって、アダムスキの体験にたいする疑いや不信の念は一掃されるに違いありません。

宇宙哲学の、地球哲学に比してはるかにすぐれた内容を学ぶことによって、この広大な宇宙にわれわれより進歩した文明が存在し、われわれより古い連続した過去を持つ文明が存在することを地球のわれわれは学ばべきだと思えます。

デカルトは絶対に疑い得ない真理がこの世にあるかどうかを真剣に問うことから始めました。彼はそのような真理を得るために、あらゆるもの、あらゆることを疑ったわけです。

このようにあらゆるものを疑う方法をとることに、彼は疑い得ないものを発見しました。

それは「あらゆるものを自分が現に疑っているという事」と「それだけはどうにも疑うことができないという事です」。

デカルトはこの事実を真理として、「我思う、ゆえに、我あり」(コギト・エルゴ・スム)と表現し、そこから哲学は出発すべきだとしたのです。

この考え方の確実さ(考えている内容がたとえ間違っていたとしても、今「現に考えている」という事実は疑い得ないこと)を主張することによって、近代の地球の哲学は幕をあげたわけです。デカルトの後、多くの哲学者がデカルトのあとを引きつぎ、デカルトを批判し、色々の方向に各々の哲学を展開させました。しかし人々は常にデカルトのコギト(デカルトの「我思う、ゆえに、我あり」のラテン語)に戻り、あるいはコギトを解釈し導くことから出発したのです。

デカルト以後の哲学者スピノザ、ライブニッツ、カント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲルらの哲学を学んでみると、哲学者のあいだでだんだん意識という言葉を使用する回数が多くなります。あるいは意識について意識的になってきます。

このことは、近代に入ってから以後、地球の哲学は意識重視の哲学となってきたということを意味するでしょう。

十九世紀に入ると、ブレンターノ、フッサール等の哲学者が出てきて、デカルトのコギトを意識の哲学へと発展させてゆきます。そして二十世紀にはサルトルを頂点とする実存主義哲学が意識を最重要視して研究をすすめてきたわけです。

しかしデカルト以後、意識が哲学界でますます重視されたとはいえ、今日の哲学界を見ますと地球の哲学は一つ

の枝道に迷い込み、極端な独善と極端な無視、麻痺に陥っています。つまり主題としては意識という本道へと進みながら、一方、内容ではますます本道から遠ざかるという二分極化をたどっているのが現状だと思われるのです。そして、哲学は常にその時代の文明を支えているのですから、今日の地球の文明もまたこの二分極化の道をたどっているようです。

このような二分極化はそれぞれの哲学者たちの思想において、一つの矛盾として現れています。

この矛盾は近代の出発点でもあったデカルトにおいては、精神と物体との間の深いみぞとしておいしく現れており、しかもこの矛盾は現代の哲学においても解決できていないように思われます。

デカルトは「我思う、ゆえに、我あり」から出発して我とは精神であることを結論します。精神とは考えることであって、この考え方においては物体に属するいかなる属性もないことを主張しています。つまり精神は延長(長さ、大きさ)を持たないというわけなのです。

デカルトの神の証明

次にデカルトは人間の精神が不完全であるのに完全な観念を持つことから、われわれが生まれたときすでに完全な

実体について知る能力を持つていることを導き出します。完全な実体は神です。これが有名なデカルトの神の証明です。

この完全な観念をわかりやすく説明しますとこういふことです。円というものにはあるものの、完全な円というものは一つもない。精密に計ればかならず不完全な円です。ところが人間は完全な円を考へることができます。中心から等距離の無限の点によってできた円、あるいは中心から等距離の完結した軌跡が完全な円の観念で、完全な円は観念においてのみ存在するわけです。

彼は精神の存在、神の存在から、つぎに物体の存在を導き出します。物体(物質)とは延長を属性として持つ実体です。延長、つまり拡がりのことです。ついでデカルトは身心の問題に入つてゆきます。精神は本質的に思考であり、肉体は拡がりとして精神に対立するもので物体です。ここには精神と物体との二元論と同じく、身心の二元論が現れています。

二元論とは何か

ここで二元論というのは、世界、宇宙、あるいはすべてのものを二つのものから出発して説明する思想のことです。ギリシヤ以前から地球において、人々は一つのもことからすべてが説明で

きるはずだという考えを抱きつづけてきました。それなのに人々は二つのものに常になづかつてきたのです。精神と肉体、思考と物質、存在と虚無、光と闇、神と悪魔などです。

もちろんデカルトも精神と物体、心と肉体等の自説の二元論を一元論に乗り越えようと努めております。精神と物体は神の被造物として一元化され、身心の二元論もまた神の被造物として一元化されているのです。しかしデカルトにあつてはこの二元論まではなかなかうまく説明できていたのですが、それを一元化する努力はすべて神の恩寵に頼るといった調子で、人々をなかなか納得させ得なかつたようです。デカルトは精神は実体であるといっています。そして物体もまた実体であると説明しています。

この実体とは何を意味するかという点と「実体とは、それが存在するために他のものを必要としないような存在である」との意味を示します。

そうすると真の実体とは神であるはずで、神は始めなく、終わりなく、何か他のものによつて作られたものではなく、自らを作り、自らを支えつつあるものだからです。神が存在するかどうかの議論はさておいても、少なくとも神がもし存在すれば、神こそ実体といえるもの、そして神だけが実体といえるものであるはずで、デカルトは

します。彼にあつては神は実体であり、しかも絶対に存在するものです。

しかし、そうだとするとデカルトが精神を実体とし、物体を実体としていることはおかしくなるのです。なぜなら精神はデカルトにあつては神に造られたものであるからです。それにまた物体も神に造られたものであるからです。物体も精神も神に造られ存在したとき、「それが存在するために他のものを必要とした」のですから実体ではないはずで、

それなのに精神はデカルトにとつて神ではないのです。精神にとつて神は他であると彼は説明しました。なぜなら、デカルトの神の証明は、不完全な存在たる精神が、自己とは異なる完全な観念を抱き得ることから出発して行われたのですから。

デカルトもこのことに気づいていました。彼は、精神と物体とは、それが存在するのに神の協力が必要としないうるからです。

神は真の意味で実体であり、精神と物体は広い意味での実体であるといふから主張しても、いったん神と精神と物体とを分離させてしまえば、精神も物体も実体でなくなつてしまいます。

困難はそれだけではありません。精神と物体を神から分離させてしまえば、たとえその始めに精神と物体とが神から創造されたのだと主張したとしても、

も、創造後は、精神と物体はそれぞれ自己によつて自己の存在を支えるしかありません。これら精神と物体は神の手から離れてしまつたわけですから、デカルトがなぜ精神と物体を実体ではないと主張できず、広い意味でも実体であるとしなければならなかつたかの真の理由はここにあるのです。「精神は神でなく、物体は神でなく、初めに神によつて創造され、今は神の手をなれた被造物である」という信念のために、デカルトは精神と物体をまがりなりにも実体であるとしなければならなかつたわけでは

しかしそうなると今度は、実体たる精神、実体たる物体が、創造者である神をひきずりおろし神が神でなくなつてしまいます。

神はすべてでなければなりません。神は始めなく、終わりなく、自己原因にして絶対的存在です。神はあらゆるものを創り、その創造者にして被造物でなければなりません。

それなのにデカルトは「精神も物体も、その始めにまるで産婆さんのように、神の協力を得て創られたが、その後は神の手を離れそれ自身で存在を支えている」と主張しているのです。これでは神の居場所はどこにもありません。全ての精神とすべての物体から神は追放され、もはや神は神ではなく、実体でさえもなくなつてしまいます。

神と精神と物体とを分離したところ



▲スピノザ

デカルト以後の哲学者を見ますと、十七世紀オランダの哲学者スピノザは

實在論と観念論

それらも、神と精神と物体を分離したところから始める一大前提から出発した当然の帰結だったのです。デカルト以後の地球の哲学者はすべてこの大前提を受けついでいるといえます。

デカルト以後、今日に至るまで、この大前提を越える哲学者はついにひとりも出ておりません。確かにそれぞれの哲学者は、デカルトの提出した困難な問題を何とかして乗り越え、解決しようとして努力しました。しかし、いつも同様の困難に立ち戻っているのです。

から出発したデカルトは、この地球の近代哲学の出発点になりました。彼の哲学は前提なしにコギトの真実を発見することにより、その後の哲学を方向づけました。とはいえ、同時に「神も精神も物体も実体であり、しかも実体でない」という受け入れがたい問題を提出したのです。

精神、神、物体の三つのうち、神のみを实体として、他は実体ではない神の属性にすぎぬものとしておきます。スピノザは神の優位を認めたくて、しかし神のみを实体とみなすことにより、彼の思想では精神と物体はないがしろにされてしまいました。

その後、物体の優位を認め、自我、精神を幻想とする思想も現れました。経験論、實在論、唯物論、等と呼ばれる一つの流れです。

一方では精神の優位を認め、他を軽視する思想も出てきました。観念論、認識論などと呼ばれる一つの思想の流れがこういうものではないでしょうか。

各々の哲学者は、自己や自派の思想を擁護し、他派や他の思想を批判しましたが、現在からふりかえってみますと、各々の哲学者の思想はそれぞれなるほどといわせるものをもっています。また彼らも他派を批判するその批評もまた各々なるほどといわせるものが多いのです。しかし全体としては、常に片手落ちな哲学に陥っている。これが地球の哲学に共通した特徴でした。

實在論によると認識とはすべて外界が意識に働きかけることと理解し、あらゆるものが所与であるとし、動物も人間も身体としてのみ知覚されるのですから、動くものとして確かにそれは与えられています。しかし動く他人が機械ではなく、魂を持ち、意識であることを實在論はどこまでいっても

確言することはできないのです。實在論者はもちろん他人が意識であることを確信しています。しかし、その確信がどこから来るのかを實在論では説明できないだけのことなのです。外界が實在論者に与える他人の身体の動きによって、彼は他人が存在するであろうと推測することはできても、いつまでも推測以上の手段は實在論にはないからです。實在論は外界に近づくに認識という手段しかもっていないのです。彼らは知覚しか認めていないといつてもよいでしょう。

これは知覚至上主義、別の言葉で言えば現象至上主義ということでしょう。観念論も同じように認識至上主義をとります。ただ實在論と異なるところは、實在論のように外界をまず實在として定立しないで、観念論は存在をすべて認識に還元してしまうことです。「存在するとは、知覚されることである」とするわけです。

そうすると今度は認識の存在、あるいは知覚の存在を観念論は保証しなればなりません。しかし認識そのものは同時に認識されているわけではなく、

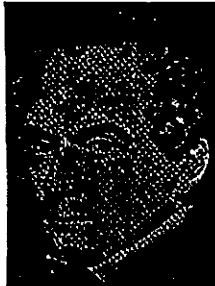
知覚そのものも、同時に知覚されているわけはありません。しかも、たとえ、後になってから認識そのものが認識されたとしても、今度は認識そのものの認識の存在を保証するためにもう一度それは認識されねばならず、こうして無限にさかのぼって無限に認識を続けなくてはならないという、認識地獄へ落ちるしかないのです。

結局、實在論者が外界の存在から出発したように観念論は認識の存在を保証することはできず、しかも認識の實在論から出発しなければならぬのです。

認識については観念論は實在論に変わるわけです。ちょうど他人の存在について、實在論者がいつのまにか観念論者になりはてていたようにです。

地球の哲学はその後、實在論、観念論を克服するために十九世紀後半から新たな出発を始めました。意識が大きくとりあげられることになったのです。この動きは實在論、唯物論の流れと、観念論、認識論の流れとを総合して乗り越えようとする哲学者達の試みのなから出てきました。

十九世紀ドイツの哲学者ブレンターノは心理記述として意識を重要視し、その後の地球の十九世紀ドイツ哲学界の流れを大きく変えました。



▲ブレンターノ



▲フッサール

彼は、内部意識の明証性と意識の志向性を意識の原理として発見しました。外界を知覚するとき、内部意識がある。つまり、何かを見ているとき、人は見ていることを意識しているということです。

人が何かを見ているとき、その何かは幻であって間違っている可能性はありますが、しかし、見ているという内部意識の明証性は間違いないということとです。

これはデカルトのコギト（我思う、ゆえに我あり）が意識として再びとりあげられたことを明らかにしています。ブレントラーノは種々な意識について記述しました。そして意識はどのようなときにも必ず何かを志向していることに気づいたのです。何も志向しない意識はないということとです。

ブレントラーノの影響を受け、少し遅れてフッサール（ドイツ）が二十世紀前半に出て、現象学と銘うって意識をデカルト的に記述しました。

時代は意識の哲学を要請していたのです。

フッサールは「すべては現象である」

とする現象主義に徹しました。すべては意識にとつての現れである。つまり現象であるとしたのです。

彼は意識を記述することにより、「意識にとつて本質的なものは意識作用と意識内容である」という意識の構造に人々の注意を喚起します。意識は常に何ものかの意識として、外へ、自己ならざるものへ超越する（向かってゆく）活動であり、自己以外の対象を立てないような意識はあり得ないことを強調しています。

フッサールの現象主義ともいえる主張を受けて、地球の哲学の動向は、ハイデッガー（二十世紀ドイツ）サルトル（二十世紀フランス）等の存在論へと達しました。

この思想は現象学、存在論、実存、などという、耳なれない用語によって意識を追い求めた哲学と云ってよいでしょう。

現象学とはあらゆる存在を意識現象としての現れに還元しようとする立場です。しかしあらゆる存在は現象としての現れだとしても、現象の存在は超現象的存在だとサルトルは言っています。

存在することとは意識することではあるが、意識するためには存在がその条件として存在しなければならぬ、その存在こそ超現象的存在であるとは彼は言うのですが、この超現象的存在は実在論の水準でも、観念論の水準でもなく、現象主義の水準で言われている

ものでもないことを注意する必要があります。

ともあれ、サルトルは現象学から出発し、現象を重要視しながら、現象学から一歩踏み出しています。

この点についてサルトルは意識の前反省的コギトを主張しています。これはデカルトのコギトを意識において一歩進めたものです。

意識の前反省的コギト

この意識の前反省的コギトはわれわれ人間が常に経験しているものとしてある意味では理解するのに簡単です。

私が机を見ているとします。私は机を知覚しています。机は空間のなかに現れています。このとき私は私の知覚を直接意識しています。つまり机を見て私は机が空間内に現れていることを意識しています。この意識は「私が机を見た後で私の行為（知覚）について反省することによって得た意識では絶対ではない」ということとです。私は反省なしに、机を見ながら、同時に机を知覚することを明証的に（はっきりと）直接意識していたのです。これは絶対にその後反省して初めて得られた意識ではなく、むしろわれわれが反省することができるとは、あらゆる知覚が反省される前に、知覚するまさにそのときに、直接自己の知覚を意識しているからなのです。

サルトルの発見

この前反省的コギトの発見によってサルトルは何を得たでしょう。

それは「意識が絶対者である」という発見だったので。意識は絶対者です。なぜなら、あらゆる因果関係の成立は意識の存在を前提とするからです。われわれが知覚、世界、世界のなかのあらゆる物を反省することができるとは、意識の前反省的なコギトがまず明証的に自己意識として存在しなければなりません。さもなくばわれわれはすべての手がかりを失います。

あらゆる因果関係の成立は意識の明証的な存在を前提とすることを、サルトルは「意識にあつてはその実存が本質に先行する」と言っています。意識がこれであつたりあれであつたりするためには、まず実存していなければなりません。つまり「快樂が存在するためには快樂の意識が実存していなくてはならない」というのです。

むしろ宇宙哲学を知っているわれわれは、意識こそ因である。意識こそ絶対者である」というべきであることを



▲サルトル

すてによく知っております。

サルトルの哲学と 宇宙哲学の相違点

しかし、サルトルの哲学は宇宙哲学とは正反対のところも多くあるのです。この点を比較してみましよう。

(1)意識 サルトルの哲学では、意識は絶対者ですが実体ではないとされています。これに対してアダムスキーの宇宙哲学はこう言います。「意識は絶対者で、実体であり、意識こそ神である」と。

ここで絶対者とは、それが存在することを説明することも理由づけることも因果づけることもできないことを意味しています。むしろ、あらゆる説明原因、因果は意識の出現後に起こり得るのです。

しかし、地球の哲学（ここではサルトルの存在論）は意識を実体とは見ていません。意識が存在するためには必ず他の存在を必要とするからです。他の存在とは何かというと、たとえば、先ほどの、世界のこの空間内に机を意識している私の意識の場合、机こそ、「他の存在」です。「意識はこの場合、机の存在にいわばよりかかって存在している」とサルトルは主張するのです。

ここで意識の志向性を思い出して下さい。あらゆる意識は何ものかの意識であると考えましたが、この意識は、「意識の志向する存在によりかかって

存在している」と説明するのです。意識は実体ではない絶対者で、存在するために常に他の存在に支えられているとされています。

このようなサルトルの哲学は、デカルト流の、精神と物体を分離して考えることに発していると思われまます。サルトルは「意識は無である」と言い、存在と無の二元論を、デカルトの精神と物体の二元論にかえたのです。デカルトは精神と物体をそれぞれ実体として分離し、その後で、なぜ精神は物体と関係するのかという問題につきあたって、はたと困惑してしまったのですが、サルトルはこの困難を「意識は実体でない」とすることによって乗り越えたのです。「意識は他の存在によってのみ存在し、その存在を乗り越える活動」と考えます。そうすれば意識は関係そのものの存在であり、しかも関係そのものを意識している存在なので、すから、デカルトのような困難はたしかにここにはありません。世界に關係が存在するのはなぜか？ 世界に無や不在が存在するのはなぜか。それは、「意識が關係としてしか存在し得ない非実体的絶対者であるからだ。それは意識自身が無であり、不在であるからだ」というわけなのです。

(2)即自存在 意識にいわば存在を貸し与える存在、先ほどの例では机の存在、そして机のまわりのあらゆる存在、世界の、宇宙の存在ですが、このような

存在をサルトルは即自存在、といっています。これは意識のように「他のものとの關係においてみられる存在ではない」との意味を示します。「それ自体において存在する存在」という意味で、即自存在と名づけたわけです。

この即自存在はサルトルによれば、「即自存在はただあるだけで、即自存在はいかなる説明もできず、ただ存在する。それは不条理に存在する。それは結局、偶然に存在する」と言っています。

地球の哲学において、もちろん、サルトルに對立して、この即自存在を偶然な存在ではないとする哲学もありまます。しかし、かりにこの即自存在を神に創造されたものだとしても、この即自存在と神との分離を認めるならば、結局はサルトルの結論と同じになってしまうのです。存在自体は神に作られたとしても、創造された後、存在は神から離れ、自らを即自に支えるとしたら、この存在はやはり不条理かつ偶然の存在になってしまうからです。

即自存在は超現象的な存在として、偶然に、しかも不条理に存在し、しかも意識に存在を貸し与えるのですから、こうなると意識もまた偶然に存在し、不条理に存在する絶対者ということになるのは当然です。そうするとサルトルは神と意識をどのように考えるのでしょうか？

(3)神 サルトルは言っています。「意識

が存在するならば神は存在しない。即自存在が存在するならば神は存在しない。かりに即自存在が神に創造されたとしても、それらが神の主観性のうちになく、客観的に存在するからには、自らを支えねばならず、神から独立分離したのとして存在することになる。だから神は存在しない」

以上、「存在は偶然に存在し、意識は実体ではない絶対者で、神は存在しない」

これがサルトルのそれなりに首尾一貫した哲学です。しかし彼の「実体ではない絶対者」は、デカルトの「精神」が真の実体ではなく広い意味の実体であるとの弱さを持っていたごとく、主張の弱点となっています。この点を留意しながら、サルトルの哲学をもう少し調べてみましょう。

(4)動物、植物、細胞、物質と意識との關係 サルトルは動物が意識をもっていることには恐らく同意しているようですが、それについては哲学の興味の的ではないものとして、判断中止というが、触れていません。ましてや植物が意識を持っているか、細胞が意識を持っているか、物質が意識を持っているかについてはもちろん直接触れてはいませんが否定していません。(以下次号)

（筆者は昭和九年生、鳥取県出身。慶応大学法学部・文学部哲学科卒。会社員、文筆家）

大盛況！ 60年度日本GAP総会

- 日時 9月22日
- 会場 東京都中央区銀座7丁目「銀座ガスホール」
- 出席者 230名



朝夕の冷え込みがいよいよよすがすがしい初秋九月二十二日、昭和六十年年度の日本GAP総会が開かれた。

今年の会場は今までとは違い、東京銀座ガスホールである。午後一時、満場の聴衆の中、司会の篠氏が今日最初の講演者遠藤昭則氏を紹介した。

遠藤氏の演題は「宇宙船(円盤・母船)の推進原理の研究発表」である。氏は多年にわたる独自の金星文字解説の成果を、美しい図面のスライドを多数用

いながら説明してゆく。氏の金星文字の話は本誌89号にも出ているが、今日の話の内容は更に検討が重ねられ、磨きがかかっており、真に圧巻であった。私が特に感銘を覚えたのは、宇宙文字は個々の文字それぞれが自然の動きを表しているということであり、宇宙の意識に聞き耳を立ててアイデアが湧いてくるのを待つという、アプローチにあたっての態度である。現代は科学や技術が発達して相当の高いレベルにあ

るかのように見えるが、果たして自然界の息吹に合った発達をさせてきたのか、単に数学的に技術的に矛盾がないというだけで、無味乾燥な理論を構築し、自然のエネルギーの流れに合致しないまま積み上げて今日に至っているのではないのか等々自然と人間のかかりについて大いに考えさせられた。

氏の講演の中で特にひかれたことは、文字を解説するには立体的に考えるということや、文字と文字との空間が重要な意味を持つ等沢山あるが、特にハッとしたのは、磁気についての法則が、鋼鉄の磁石にだけ当てはまるのではなく、自然界のどのような微細な生物にも潜むということ。そしてこれは円盤の推進原理の根本であり、子供にもわかるやさしいものであるということである。私は宇宙空間の満ち満ちたエネルギーを思い浮かべると、ふとアダムスキーが土星旅行に用いた宇宙船(円盤)が生きもののように、宇宙を航行したことを思い出した。

十分間の休憩をはさみ、次は久保田先生による「世界のUFO問題とアダムスキー出現の意義」である。先生はスライドを多数使用しながら、著名な偉人、天文学者等が実は円盤を目撃していた事実を話した。あの有名なコンプスも航海中にUFOを見ており、八六年にお目にかかれるハレー彗星の発見者エドモンド・ハレーも実は円盤を見ていたとは……。その他、今まで

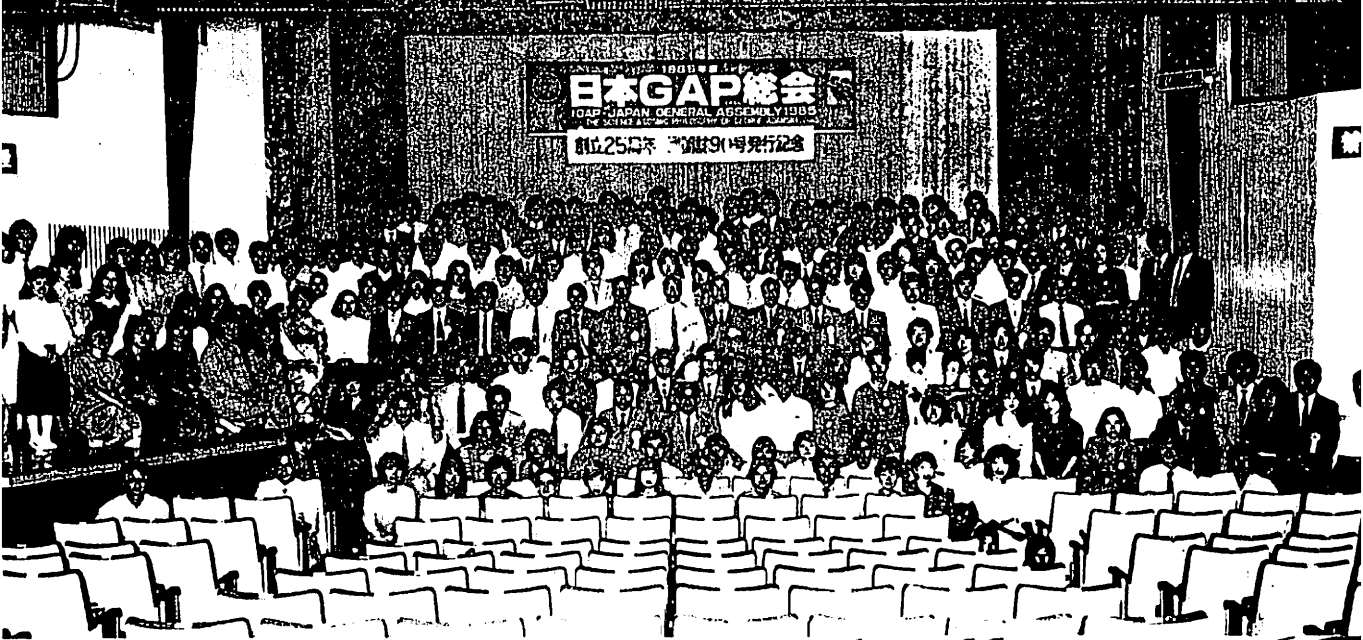
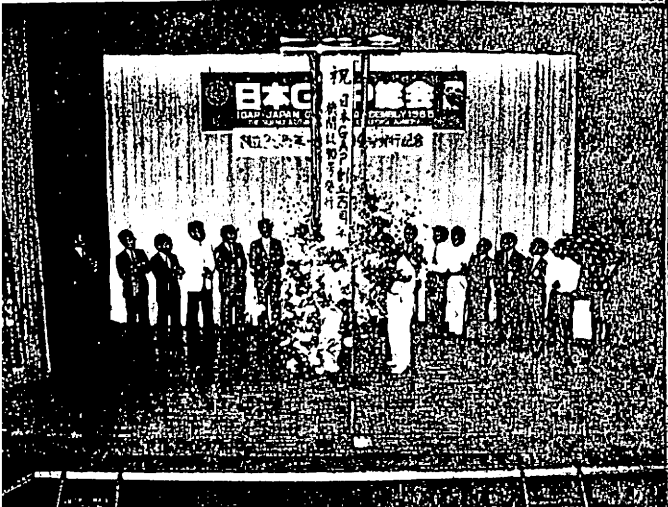
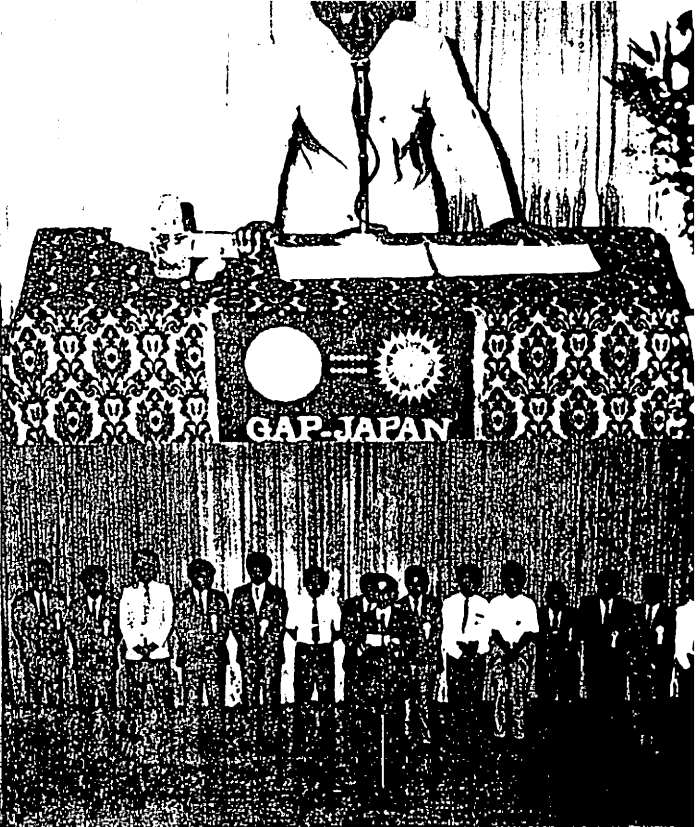
にUFO関係の紙面をにぎわした人たちの人物評、アダムスキー肯定派、否定派等の紹介があり、いまだかつて、アダムスキー問題がウソだとする証拠はない。ことを強く主張した。偉大な発明、発見の裏には必ずといってよいほどブラザーズの援助があり、正しい者は最後には勝つという見本を示され、勇気が湧いてくるのを覚えた。最後に「円盤に乗った日本人少年」の驚異的実話を聞いて、これからはウソだホントウだなどと悠長なことは言っていられず、円盤に乗り込む時代だと痛感した。

この後は、出席者全員が一同に会しての記念撮影があり、「日本GAP創立二十五周年と機関誌九十号発行」のお祝いのセレモニーが華やかにとり行われ、アダムスキーの肉声、かの有名なロードファイフィルム公開など、多彩なプログラムに満ちていた。

総会終了後は銀座のレストラン「四季」において大祝宴会が催され、歌やフルート等のかくし芸、それにビンゴゲーム等で楽しい夕べのひとときを過ごした。この後も二次会、三次会へと繰り出した組も多数あり、年に一度のGAP総会の名残りは尽きそうにない。

もう優れた先人の講演を漠然と聞いてのぼんとしていた時代ではない。会員一人一人が自覚して実行に移す時代が来たことを予感させる新しい時代の幕明けというべき素晴らしい総会であった。

(齋藤泰文)



投稿欄 UFO広場

不思議な動機で本誌を知る

福岡市 塩山登代

初めてお便りします。銀行に勤めて五年目です。先日Uコンに出会い、とても感激しています。

実はこの二、三年私には自分で理解しがたい不思議なことが起こりました。しかしUコンに出会ってその意味や原因がわかりつつあります。とてもうれしいことです。その不思議なことをここに書いてみようと思っています。

私は銀行で振込票を配帳(オペレーション)する仕事をしています。去年の夏、いつものように仕事をしていたとき、私は一つの振込票にふと手をとめました。それはサラ金への振込でした。振込人の名前を入力しようとしたとき、私はまっ赤な血が頭の上に振りかかってくるような気がして背すじがゾッと、そのまま動けなくなりました。変だなど思い、その人の名前をメモして家に持って帰り机の中に入れてしまいました。数日後私の銀行で強盗事件が起こりました。犯人は逃げる途中、つかまえようとした学生を刺して逃げました。しかし翌日すぐにつかまりました。その日の新聞を見て驚きました。犯人の名前と私がメモした名前が同じだったのです。この他にも似たような不思議なことが多くありましたが、Uコンに出会ってその謎が

解けていくような気がします。

私がUコンに出会った動機は次のとおりです。六月のある夜、寝ようと思つてベッドに横になつていました。すると声が聞こえます。「好きだ」というその声は男性です。「好きだ」というその声は男性です。私も思わず「私も好き」と答えたのです。その声は私の体内で響きました。次の日にその声の主に誘われてヤキトリ屋へ行きましたが、あれはテレビ番組だと思いましたが、そこで寝る前に部屋を暗くして「愛している」という気持ちを起こしてそれを夜空に飛ばすことを試みました。すると急に聖音が聴みなくなり、眠っているうちにイエスは宇宙人ではないかという気持ちが起こりました。そして宇宙や宇宙人について研究をしているグループがどこかでひそかに活動しているという想念が頭に浮かんだのです。そしてその人たちが書いてある雑誌があることもわかってきたのです。なぜこんな考えが浮かんだのか自分にもわかりませんが、とにかくその雑誌を探そうと思い、何軒かの本屋に行つたのでありますが、うちにある本屋にふと足をとめて店内を見たときにUコンが目についたのです。とても不思議です。借じてもらえるでしょうか。いま私の心の中には日本GAPに入りたい、そして平和と愛に満ちた、さびしさのない素晴らしい世界を知りたいという気持ちでいっぱいです。

UFO出現 UFO出現

東京 佐々木八郎

東京はまだ暑い日が続いていますね。イスラエル、エジプトも暑い日が続きました。イスラエルは美しい生命の光に満ちあふれ、イエスの生命の輝きが空間に刻み込まれているように見えます。飛行機に乗っていると見学しているときもスペース・ビーブルの激励と祝福の想念も感じました。私はただ感謝の想念を送るだけで一杯でした。

八月十九日の午後八時すぎ、三大ピラミッドとスフィンクスの「光と音のショー」を見ていたとき、まばゆい強烈な光を放つ光体出現しました。里のように見えていたものが動き出し、急に大きさとスピードを増し、飛びながら火の粉のようなものをまき散らし、色もだいたい色から青色に変わつていきました。そして突然消えました。消える一瞬間にひととき大きく光りました。この光体以外にも天頂付近で不規則な動きを見せていた光があったようです。この出現の意味は日本GAPに対する祝福と激励であると思います。

スペース・ビーブルの顔が浮かぶ。

新潟県 岩崎節子

丁重なお手紙とお写真をお送り頂きまして誠に有難うございました。早速子供達に読んであげましたところ、みんな大喜びでした(注)岩崎先生担当のクラス全員にメッセージを依頼されたので編者が送った。私が感動致しましたのは、小学校の小さな子供達を、子供ではなく人間成長の一時期とみなして、先生のお手

紙の中で「諸兄弟」と呼んで下さったことです。そして一人ひとりの子の質問に対して詳しく答えて下さったことに深く感謝致します。

今回の日航の事故、きつとスペース・ビーブルもご存知だったでしょう。あの夜思わず空を見上げて「プラーズ、事故が起きなさい」と呼びかける人、目の前のスクリーンに四、五人のスペース・ビーブルが現れ、憐れみ深い目で地上を見おろしている様子が浮かびました。

すこく面白かった
Uコン90号
米ワシントン州 広田真知子
お元気ですか。十二月に一度日本に帰ろうと思つています。

Uコン90号のすこく面白かったことー。いつもだと次の号が来てもまだ読み終えないでいるのに、今回はいつか読んでしまいました。いま91号が待ちきれないといったところです。読む身は楽なもので……。編集のお仕事は大変でしょうが頑張ってください。GAPから大いなる恵みをもたらしてもなかなかお返しできなくて不甲斐ないわが身を嘆くこの頃です。でもGAPを知っていて本当に良かった。Thank you very much.

日本GAPを知った喜び
高松市 溝口鈴香

UFOコンタクトティー88号を受け取りました。わざわざ送ってくださつて有難うございます。心から感謝しています。高松市円隆降下事件の舞台となった高松市木太町は私の住んでいる町から車で十分足らずのところ、こんな大事件がこんな身近に起こったことを知り、大変驚い

ています。

私はずいぶん昔からUFOに対して深い興味を持っていました。もっと詳しく知りたいと思いつつも、私の情報源はUFOと占占いを同次元に扱つたような本とか、水曜スペシヤルのような興味本位の番組だけありませんでした。今回日本GAPのような専門的な団体があるのを知つて非常に嬉しく思っています。

素晴らしい今年度総会

兵庫県 宇野伯姓・仲間秀樹

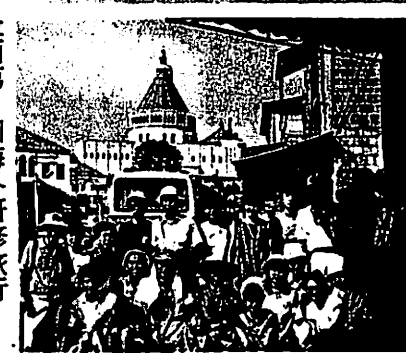
先日は今年度東京総会の大成功おめでとうございました。先生のお元気なお顔と素晴らしいご講演を拝聴できて嬉しく思いました。お話を聞いてあらためて日本GAPの知らせているのが理解できました。松山事件には壮大なプログラムがあり、一つのビジョンが見えてきます。

今年の総会は会場も場所も企画進行も素晴らしいです。東京の銀座で洗練された環境でした。大祝宴会も立派なレストランで楽しく歓談できました。先生を始め本部役員の方々の抜群のアイデアと献身的なご尽力のおかげと感謝しております。



〈予告〉60年度地方支部大会—その4—

	第6回 山形・仙台合同支部大会	第3回 群馬支部大会	第3回 福岡支部大会	名古屋支部大会
日時	10月20日(日) 午後 2:00→6:00	11月3日(2日連休の初日) 午後 1:00→5:00	11月17日(第3日曜日) 午後 1:00→5:00	11月24日(日) 午後 1:00→5:00
会場と交通	「飯期(おいたま)総合文化センター」2F 203研修室 ☎ 0238-21-6111 山形県米沢市金池3-1-14 奥羽本線米沢駅下車徒歩20分、タクシー5分。東京方面からは上野駅より東北新幹線で福島下車、福島より奥羽本線特急に乗り換えて米沢まで40分。上野・米沢間は2時間30分。	「太田グリーンホテル」2F 会議室 ☎ 0276-25-8511 東武線太田駅下車、徒歩15分。タクシー約500円。東京浅草と太田間は急行ロマンスカーにて1時間45分。	「福岡商工会議所」5F 501号会議室 ☎ 092-441-1111 福岡市博多区博多駅前2丁目9番28号 博多駅(博多口)より北へ徒歩7分。博多区役所となり。	「愛知会館」☎052-936-5171 名古屋市東区葵三丁目24番11号 地下鉄利用の場合 千種駅下車(東山線名古屋駅より8分)中央出口より徒歩1分 国鉄利用の場合 千種駅下車(中央本線名古屋駅より11分)徒歩1分
会費	左に同じ	左に同じ	左に同じ	左に同じ
プログラム	司会 柴田文子 2:00 支部代表挨拶 清水正、笠原弘可 2:20 講演「アダムスキー哲学の生かし方」久保田八郎先生 3:30 休憩、記念撮影 4:30 全員自己紹介、質疑 6:00 閉会	1:00 支部代表挨拶 久保寺信一 1:10 講演「GAP活動の意義」久保田八郎先生 2:15 休憩、記念撮影 2:40 全員自己紹介、質疑 5:00 閉会	1:00 支部代表挨拶 喜多正直 1:10 会員講演(講演者未定) 1:40 講演「コズミック・マンになるためには」久保田八郎先生 3:00 休憩、記念撮影 3:30 自己紹介、質疑 5:00 閉会	司会 大山耕一 1:05 支部代表挨拶 林 国直 1:15 講演「宇宙的フィーリングを起こす方法」久保田八郎先生 2:30 休憩、記念撮影 3:00 全員自己紹介・質疑応答 5:00 閉会
夕食会	大会終了後6:30から8:30まで会場近くの「ニューグランド北組」で開催。(蔵崎総合文化センターの南向かい) 会費 ¥5000	大会終了後6:00から8:00まで大会会場と同じホテル内2Fにて希望者による夕食会を開催。 会費 ¥5000	大会終了後6:00から8:00まで「ライオンズホテル」にて希望者による夕食会(立食パーティー)を開催。 会費 ¥5000	大会終了後5:30から7:30まで大会会場と同じ会館内で希望者による夕食会を開催。 会費 ¥5000
宿舎	「ビジネスホテル金地」をお世話します。夕食会場の東隣。 1泊お1人様¥3500(シングル・ツイン共) 収容人員は32名まで。	「太田グリーンホテル」をお世話します。 シングル ¥4800(税サ込) ツイン ¥8400()	「ライオンズホテル」をお世話します。☎ 092-451-7711 シングル ¥4800 ツイン ¥8500 大会会場より徒歩4分。	「愛知会館」(大会会場と同じ)をお世話します。 シングル ¥4070(税・サ込) ツイン ¥7700()
申込	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで10月19日までに下記へ。 〒992 山形県米沢市中田町901-2、県営中田アパート141号 清水 正 ☎ 0238-37-5635	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで10月末までに下記へ。 〒373 群馬県太田市新井町744-1、久保寺信一 ☎ 0276-25-5958	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで11月15日までに下記へ。 〒814 福岡市城南区金山団地40-204、喜多正直 ☎ 092-863-5438	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで11月20日までに下記へ。 〒491 愛知県一宮市大和町北高井1478 林 国直 ☎0586-45-6468
観光	大会翌日は山形交通観光バスで上杉の城下町米沢市内観光の予定。好天ならば吾妻山、天元台まで足をのびしてロープウェー登山を行う。朝10:00出発、午後3:30米沢駅着、解放。	大会翌日は榛名富士として有名な上毛3山の一つ榛名山、榛名湖を小型バスで周遊。午後5:00に太田駅着、解放。	大会翌日は福岡市内観光。	大会翌日は野外民族博物館リトルワールドを見学予定。車で約1時間。車は支部で調達。入場料¥1000
備考	10月は大会のため月例会を中止。	11月は大会のため月例会を中止。	11月は月例会を中止。	11月は大会のため月例会を中止。



日本GAP企画第7回海外研修旅行

イエスの足跡と巨石文化の跡をたずねて

●田中正

添乗員の私とともに総勢二十一名が二組に分かれて成田空港を出発したのは八月十日と十二日である。翌朝六時にカイロ空港へ到着後、市内のシエフアードホテルへ直行する。ここで先発組の六名と合流し、朝食後専用バスでまずエジプト考古学博物館を見学した。現地のガイドはエジプト在住十四年というペテランの北原百代さん。世界の宝物ともいべき館内の出土品を大変要領よく親切に説明してくれた。

約二時間見学の後、カーン、アルカリリー地区のバザールを見学。このとき北原さんが十二日の日航機墜落事故を知らせてくれた。午後四時にホテルへもどり、夕食まで自由行動。

七時半から全員合同の夕食会を開催、各自自己紹介をする。ロビーではエジプトの結婚パーティーがあり、ずいぶんにぎやかだ。

十四日は専用バスで雄大なシナイ半島横断の旅に出た。初めての試みである。途中スエズ運河をフェリーで渡り、ラファに午後一時半頃到着、二時四十分にはイスラエルへ無事入国。過去二回にわたるイスラエル旅行でお世話になった名ガイドの榎原先生と再会する。先生の名調子の説明を聞きながらクネセットタワーホテルへ午後五時に到着。

翌十五日朝八時にホテルを出発してエルサレム観光を開始。まずオリブ山頂近くの昇天教会へ行き、次に山の展望台からエルサレム市内を眺望。ゲッセマネ庭園、旧城壁の歎きの壁、イエスが十字架をかついで歩いたビアドロローサ、ゴルゴタの刑場跡に建つ聖墳墓教会、岩のドーム、ベテスダの池、聖アンナ教会などを見学。昼食はアラブ料理を賞味、うまい。

午後にはベツレヘムへ行き、生誕教会、聖カタリナ教会を見る。エルサレムへの帰途、昨年も寄ったラマ・ブラザーズという土産物店へ立ち寄り、六時にホテルへ帰着。

十六日は園の墓。ケデロンの谷からシロアムの池まで徒歩で行き、シオン山の最後の晩さんの部屋、アイン・カレムの洗礼の聖ヨハネ教会、聖母訪問教会などを見学。いつ来ても静寂な高貴な雰囲気は満ちている。

十七日はバスで南下、大昔多数のユダヤ人が壮烈な最期をとげたマッツァダの遺跡に登り、あと死海で二時間ほど海水浴を楽しむ。あとはクムラン洞窟、エリコ、ガリラヤ湖へ向かい、十八日に遊覧船でカペナウムへ行き、シナゴーク跡、湖畔の聖ペテロ教会、タブハ、山上の垂訓教会を見学。昼食の中国料理で元気づいた人たちがいた。

こうしてイスラエルの旅を終えて空路カイロへもどり、シエフアードホテルで遅い夕食をとる。

十九日はまずメンフィスの遺跡、サツカラの階段状ピラミッド、ギザの三大ピラミッド、スフィンクスを見学。ピラミッド上空をUFOが飛ぶ!

同夜一同はピラミッドに光を照射する美しい、光と音のショーを見たが、終了直前、UFOと思われる大きな光体が約三秒間かなりのスピードで飛ぶ

のを全員が見て騒然となった。二十日は空路アスワン経由でアブシンベルへ行く。飛行機が遅れて名高いアブシンベルの大小神殿をゆっくり見学できなかったのは残念だった。この次来るときはここに一泊するほうがよいだろう。アスワンハイダムを見てから夕方ルクソールのエタップホテルへ入る。

二十一日はナイル西岸のネフェルタリ王妃墓、アメンヘルケプシエフ王子墓、メムノンの巨像、ハトシエプスト女王葬祭殿、王家の谷のラムセス九世墓、ツタンカーメン王墓、ラムセス六世王墓、セティ一世王墓などを見学。悠久の歴史と人間の権力のむなしさを感じる。四時よりカルナック神殿、ルクソール神殿の壮大な列柱群に圧倒される。酷暑に数千年耐えてきた巨石文化の威容に声も出ない。

ルクソール駅より夕方七時半発の西独製寝台列車で翌朝十時カイロ着まで快適な列車の旅を味わった。

二十二日の午後からは全員でカイロ市内を散策し、夕食は新しくできた日本料理店、なにわ、で久々に日本料理をとる。やはり日本人には和食が最高だ。ここは料金も安い。

二十三日に先発十四名が帰国し、後発組七名はカイロタワーへ昇ったり再度ギザのピラミッドを見学して八月二十六日無事帰国した。御協力頂いた関係者各位に厚く感謝する次第。



アメリカ宇宙考古学の旅

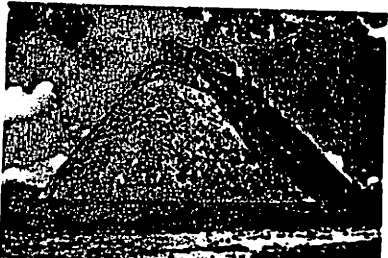
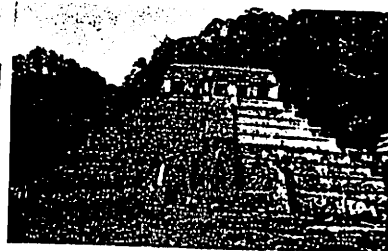
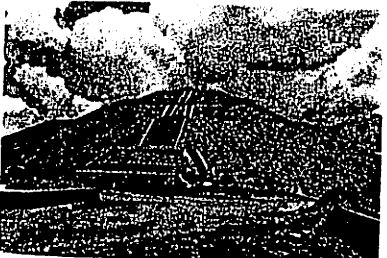
■61年8月5日→17日/13日間 ■費用未定 ■詳細は案内書を。

●恒例の日本GAP海外研修旅行は大好評裡に毎夏実施され、ふしぎにも全くトラブルなしに多大の成果をあげていますが、過去4年間はヨーロッパ・中東方面に集中しましたので、61年度は方向を転じて久方ぶりに4度目のアメリカ、3度目のメキシコ訪問の旅を行うことにいたしました。

●アメリカはアダムスキーゆかりの地で遺跡も残り、メキシコは太古のムー大陸の名残りと思われる謎とロマンに満ちた古代マヤの遺跡の宝庫で、エキゾチシズム(異国情緒)の溢れる陽気な魅力ある国です。

●今度は趣向を変えて8月5日に(アメリカは日本より日付が1日遅れる)西部随一の美しい大都市サンフランシスコに到着陸、終日市内観光、同夜市内泊。翌6日はUコンでおなじみのアダムスキー研究家ダニエル・ロス氏と会合、パーティーを予定。夜ロサンゼルスへ飛び市内泊。7日は専用バスでロスを出て一路南下、パロマー山へ登り、アダムスキーが暮らしたパロマー・ガーデンズ跡を見て、さらに山頂のパロマー天文台を見学。今回は大望遠鏡の主鏡部分まで行けるように手配予定。山を降りてさらに南下し、大軍港都市サンディエゴ泊。8日世界最大の野外動物園、シーワールド海洋公園などを巡遊。夜はメキシコ国境の町ティファナに一泊。9日にティファナより空路メキシコ市へ午後到着。ホテル直行後、自由行動。同夜市内泊。10日は市内観光後、その他を見る。11日に市の南23kmの美しい水郷地帯ソチミルコへ行楽後、銀山の歴史的な町タスコを周遊。メキシコ市内泊。12日はメキシコ市発空路ユカタン半島のピリャエルモサへ飛び、ここからバスで古代マヤ民族の聖地パレンケの壮麗な遺跡を見学。同夜ピリャエルモサからメリダへ飛び、メリダ泊。13日にはバスでメリダ南方80kmのマヤ古典期後期最大のウシュマル遺跡群を見学後、コバ、トゥルムの各遺跡を周遊する。夕方カリブ海岸の新興保養地アクマルへ宿泊。14日は終日自由行動。借られぬほど美しいエメラルドグリーンのカリブの海で海水浴。15日バスでカンクンへ行き、ここから空路アメリカのロサンゼルスへ昼すぎに帰リ、ディズニーランドで遊び、夜のけんらんたる「光と音楽のショー」を觀賞。同夜はディズニーランド泊。16日にロスより帰国の途につき、17日午後成田着、とまあこういうわけなのです。

●過去のアメリカ・メキシコ旅行と違って今度は見学場所が豊富で、しかも要点は押さえてありますから「楽しかった〜!」と歓声のあげばなしになるでしょう。GAPだけで過去7回(それ以前の出版社の旅行を加えると9回)世界の都市や遺跡を歩きまわった実績のある田中正と久保田八郎の名コンビが練りに練って企画したこの手作りの素晴らしい旅にぜひご参加下さい。



- 企画
- 主催
- 販売

日 本 G A P
株式会社 日 本 旅 行
ワールドセブントラベル株式会社
旅行代理店(運輸大臣登録旅行業代理店業1957号)

■案内書 下記へハガキでお申込下さい。

ワールドセブントラベル株式会社 田中正(宛)
〒150東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F
☎(03)499-2461

夜間と休業日は(0462)63-0615 (田中自宅)
(この広告の原稿が切までは旅行費用が算出されませんが、案内書には記載してあります)

日本GAP設立二十五周年記念静岡支部主催

UFO写真展

●8月1日より7日まで／静岡駅ビル「パルシェ」5階ギャラリー

松山支部、東京本部に続いて静岡支部もUFO写真展を開催した。今回は夏休み期間を利用して多くの学生生徒さんに宇宙空間の実態を認識させることと日本GAP設立二十五周年を記念して実施した。準備に際しては久保田先生、静岡支部会員・筒井氏、高梨氏その他の方々より多大のご協力を仰ぎ、先発の松山支部代表・伊藤氏からもアドバイスをいただいた。

一周間のUFO写真展はまたたく間に過ぎたが、終了して感じたのは「これが本当の知らせる運動だ!」ということである。

入場者と一対一で直接対話し、質問

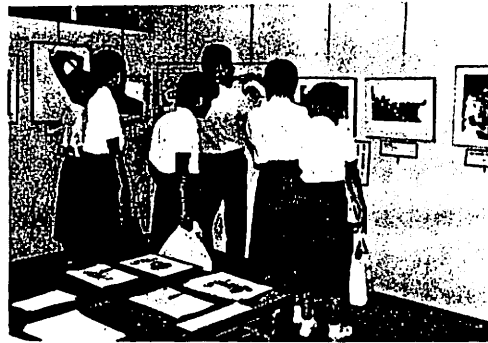
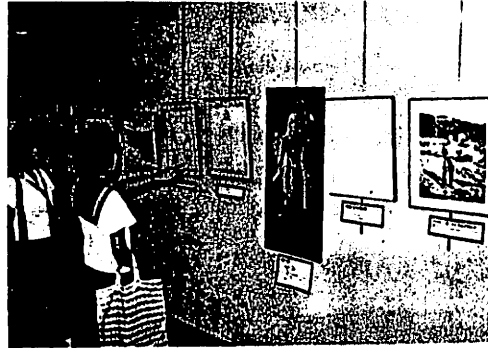
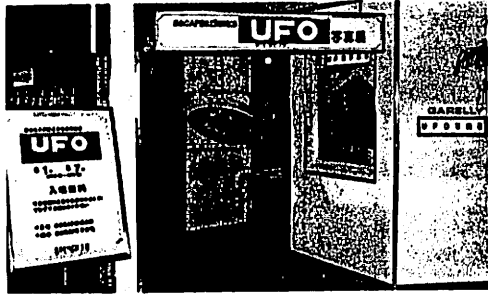
に答えるという方法は大変効果的だった。しかし一週間で六千三百人という見学者のすべてに個々に説明することは不可能なので、写真を見る態度、フーリング、関心の強そうな人を選んで重点的に案内した。こうして私たちも宇宙空間の真実を真剣に多くの人に伝えたが、そのほとんどは納得してくれたと思う。

静岡駅ビル内の一角で開催したUFO写真展だが、六千人を超える人が見学してくれたことは、UFOに対する興味を持つ人がまだ多数潜在することの証左であろう。今後機会あれば二次三次の写真展を開催して啓蒙につと

めたい。これが全国的規模で開催されるようになれば素晴らしいだろう。

こうした写真展で効果をあげるには入場者に説明するスタッフが充足している必要があるが、幸い今回は静岡支部のメンバーが積極的に協力してくれた。アンケート用紙を一千枚用意したが不足したほどである。回答を見ると、小、中、高校生など十代が七五パーセントを占めていた。また今回はアンケートに答えた人のなかから抽選で五十名に「宇宙からの訪問者」をプレゼントした。自分のUFO目撃体験を一気に話す人も何人かいた。

開催にあたって多数のGAP会員各位から絶大なご協力をいただいで深く感謝する次第である。この貴重な体験を生かして今後もスペース・プログラムの協力に励みたい。(野口敏治)



UFO写真展

●8月1日より7日まで／静岡駅ビル「パルシェ」5階ギャラリー

大好評を博した昨年十月の第一回UFO写真展に続き地元の要望にご応じて第二回目の写真展を開催される。今回は入場者がアンケートの真実を話し、UFO目撃者人問題の啓蒙を行うことと日本GAPの役割と目的を認識させるもので、次のとおり。

期間：十一月九日(土)十七日まで
毎日午前十時から夜八時まで
会場：松山市東町四丁目六十六丸三番店(二階)ギャラリー
主催：日本GAP松山支部
後援：日本GAP東京本部
協賛：文久書林、丸三番店

内容
UFO写真多数展示、UFOスライド映写、ビデオテープ全集とUFOコンクヰスト下町売、パンフレット配布、日本GAP入会案内書配布その他
期間中は松山支部代表、伊藤達夫氏その他の支部会員が会場について入場者の案内、質疑応答等について説明する。日本GAPの活動状況を説明する。前回は止むを得ず入場者数が期待される。

ジョージ・アダムスキー全集

久保田八郎訳 全7巻 B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必携の名著です。

1. 宇宙からの訪問者

338頁 ¥2500

2. UFO問題の真相

262頁 ¥2500

3. UFOとアダムスキー

350頁 ¥2500

4. 宇宙哲学

148頁 ¥1300

5. テレパシー開発法

190頁 ¥1800

6. 生命の科学

205頁 ¥1800

7. アダムスキー論説集

370頁 ¥2500

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。1952年11月20日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第1部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実践を第2部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

第1巻の補足的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係述べた箇所は重要である。第2部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの卑劣な妨害が克明に描写されている。

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第1部「死と空間を超えて」が旺巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたばう大な情報と書簡類を収録して第2部とした。

人間のセンス・マインド（肉体の心）と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理論整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の4官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシクな印象を受取る方法を詳しく解説し、他人と無言の会話をを行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

アダムスキーが「他界する数年前に出したScience of Lifeと題する12分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙の哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する周期的な書。

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が旺巻。第2部にはアダムスキー研究者として名高い久保田八郎が徹底徹底してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

※送料は各巻¥250。但し発行所宛直接注文の場合に限り、下記のように定価・送料をサービス。

☆1冊注文＝送料は出版社負担。書籍代のみご送金下さい。

☆第1巻より第3巻まで一括注文＝特別セット価格 ¥7000(送料共)

☆第4巻より第7巻まで一括注文＝特別セット価格 ¥6500(送料共)

☆第1巻より第7巻まで一括注文＝全巻セット価格 ¥13000(送料共)

郵便振替または現金書留でご注文下さい。

文久書林 〒162 東京都新宿区榎町33 Tel. 03(267)6920 振替東京4-2521



George Adamski the Cosmic Man



In the Old Testament appears the story of the Tower of Babel. Trying to understand the mystery of God, people made an effort to build a tower that would reach to the Kingdom of Heaven. As a punishment for man's arrogance, God destroyed the tower, and the language of the people became confused.

After World War II, a new tower of Babel, or rather confusion, was developed by major countries to be erected on ground the last of months in 1952. George Adamski was a Quaker at the tower as a student

of believers. Unfortunately the tower did not collapse and his name would be since been ignored because of the power's reaction.

Some people reported that there were no identified planes in our outer space. However, we firmly believe that U.S. and the Soviet have some important discoveries about the outer space because they are afraid the man would actually speak. According to testimony by William L. Dixon, there are many unexplained incidents of the U.S. space program. Other countries have an outer space unit in their American satellite have contacted UFOs near or on the Moon. For example, Dear Witness' "The Mysterious Spaceship" has revealed many incidents about the Moon.

In the Apollo 11 transcription of August 1, 1971, Russ and Brian reported that they had seen strange lights at Willander on the Moon that was truly spectral in the eyes.

"That's the most organized structure I've ever seen. Nothing we've seen before has shown such uniformity from the top of the tracts to the bottom." "What are those on the Moon? No doubt they were man-made construction, but they were too high to see on Earth. How much time? Where did they come from?"

Last year James Irwin appeared on a Japanese television show and testified that he had seen UFO during the Apollo 11 mission. Strangely enough, the most important part was not transmitted to the earth.

In May of 1975, an American space probe Pioneer 10 was sent to distant Venus. There were apparent transmissions from the planet during the period many scientists. Were they not

UFO contactee No. 1 刊行

■去る5月に発刊された英文版は早くも国際的に高い評価を得つつあり、日本GAPの活動状況と日本国内における主要なUFO出現事件の海外向け紹介に重要な役割を果たすに至った。

■日本GAP・久保田八郎会長が書きおろした格調高い英文記事「George Adamski the Cosmic Man」,「Adamski-Type Flying Saucer Comes Down in Takamatsu, Japan」にダニエル・ロス氏の「UFOs And American Indians」を加え、最後に日本GAPの活動内容を伝えた本格的機関誌。■会長みずからプロ用大型電子英文タイプライターを操作してオフセット版下を作成。デザイン、レイアウトから1字1句に至るまで会長が熱意をこめて作った、この記念すべき創刊号をぜひ机上に。英語学習用にも好適。本文中不明の点は返信用切手同封の上、会長宛質問されたい(ただし全訳文の請求には応じかねます)。

B5判 12頁 最上質アート紙使用 ¥300 送料¥170 (5冊まで¥240、10冊まで¥350) 注文は必ず郵便振替で下記へ(現金書留、切手代用は不可)。

日本GAP 振替・東京4-35912 ☎(03)651-0958

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日 時	会 場	会 費	携 行 品 ・ 行 事
東京本部	毎月第2土曜日 午後2:00-6:30 ※61年1月は月例会終了後 6:30より別会場で新年会。 会費¥2,900	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園 口」下車。改札口の真向かい。スグ。 連絡先=日本GAP ☎03-651-0958	¥ 500	2:00-3:00 会員による体験講演。 3:00-4:30 久保田会長の「テレバシー開発法」 講義と近況報告、テレバシー練習、休憩。 4:30-6:00 自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00-5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会 館」☎388-7351 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。 連絡先=平塚和規 ☎06-436-3478	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」(文久書林刊) を持参。東京例会における久保田会長の講演テー プを公開。テレバシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第3日曜日 午後1:30-4:00	長岡駅前「パークホテル」2F、ローズ ルーム ☎0258-36-2331 連絡先=眞高治夫 ☎02579-2-5562 足立直宏 ☎0252-62-0968	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」持参。東京 本部例会における久保田会長の講義録音テープを 公開。テレバシー練習、座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1:00-5:00 ※11月は大会のため月例会は中止。	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会 館」3F 国際会議棟 連絡先=喜多正真 ☎092-863-5438	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久 保田会長の東京例会における講義録音テープ公開 座談と研究発表。テレバシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1:00-4:30 ※11月は大会のため月例会は中止。 12月9日は9:00-12:00 61年1月15日曜1:00-4:30	名古屋市中区古沢町7-1「名古屋市民 会館」特別会議室。☎052-331-2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山駅」下車。 徒歩5分。 連絡先=林 国直 ☎0586-45-6468	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久 保田会長の講義録音テープ公開。研究発表・テレ バシー練習・座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10-4:20 ※10月の月例会は大会のため中止。	仙台市「市民会館」会議室(西公園内) 連絡先=笠原弘可 ☎0222-95-0725	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久 保田会長の講義録音テープ公開。テレバシー練習 座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1:00-5:00 ※10月の月例会は大会のため中止。	山形市小川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3 分。☎0236-42-5181 連絡先=清水 正 ☎0238-37-5635	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京本部月例会における久保田会長の講義録音テー プ公開、テレバシー練習、研究発表、座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1:00-4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化 会館」会議室 ☎011-271-5821 連絡先=高野省志 ☎011-822-8260	¥ 500	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久 保田会長の講義録音テープを公開、テレバシー練 習・座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1:00-5:00	静岡市駿府町「静岡県婦人会館」会議室 ☎0542-54-5221 連絡先=野口敏治 ☎0542-86-7729	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京本部月例会における久保田会長の講義録音テー プ公開。テレバシー練習、研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1:00-5:00 ※10月のみ27日に旭川市7条8丁 目市民文化会館3F会議室に変更。	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」 2F小会議室 ☎0166-26-1304 連絡先=阿部 隆 ☎01658-2-1585	¥ 500	東京月例会における久保田会長の講義録音テー プを公開。研究発表、アダスキー著「テレバシー 開発法」「生命の科学」を持参。質疑応答、テレ バシー練習、研究発表。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1:00-5:00 ※寄附金は広島市広島駅ビル内 「ステーションホテル」5F会議室。 ※偶数月は松山市民会館会議室。	松山市民会館会議室 連絡先=伊藤達夫 ☎0898-22-3060	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京月例会における久保田会長の講義録音テー プ公開。質疑応答・座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後1:00-5:00 ※11月は大会のため月例会は中止。	群馬県太田市「社会教育総合センター」 3F 連絡先=久保守信一 氏 ☎0276-25-5958 自宅☎0276-45-3544	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京本部月例会における久保田会長の講義録音テー プ公開、座談会。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1:00-5:00	青森市堀町1丁目14-1「青森市文化会 館」会議室 ☎0177-73-7300 連絡先=田村嘉彦 ☎0177-38-0416	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京月例会における久保田会長の講義録音テー プを公開。テレバシー練習、研究発表・座談会。
神縄支部	毎月第3日曜日 午後1:00-6:00	〒901-22 宇野湾市野崎1547 マキシア パート 新里方 連絡先=新里義雄 ☎09889-3-3695	¥ 500	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。久 保田先生による講演録音解説テープ公開。質疑 応答。想念観察とテレバシーの研究報告。自己紹介 座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1:00-5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」 趣味の間。☎0188-24-5377 連絡先=伊藤正治 ☎0188-62-2831	¥ 200	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京本部月例会における久保田会長の講義録音テー プ公開。テレバシー練習。座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1:00-5:00	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2 「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎044-222-4416。国鉄京浜急行「川崎 駅」下車。市バス・東横線・労働会館前。 連絡先=大崎孝典 ☎0492-65-0389	¥ 500	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京月例会における久保田会長の講義録音テー プ公開。研究発表・座談会等。
茨城支部	毎月第3日曜日 午後2:00-5:00	水戸市梅香1-2「水戸市中央公民館」 4F小会議室 ☎0292-24-6600 水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先=清水勝一 ☎0292-73-1903	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京本部月例会における久保田会長の講義録音テー プ公開。テレバシー練習、座談会、研究発表等。
長野支部	毎月第4日曜日 午後1:30-5:00 10月は第3日曜日に開催。	塩尻市大門7番町「塩尻市総合文化セン ター」第1会議室。☎0263-54-1253 塩尻駅下車。徒歩10分。 連絡先=博田文吾☎0263-58-8510	¥ 300	テキストとして「テレバシー開発法」を持参。東 京本部月例会における久保田先生の講義録音テー プ公開。テレバシー練習、座談会、研究発表等。
紀南会	毎月第4日曜日 午後1:00-5:00	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉セ ンター」1F相談室 ☎0735-21-2760 国鉄 新宮駅下車。徒歩5分。連絡先=松口幸之助 ☎0735-22-3641 夜☎0735-34-0605(呼、山中)	¥ 300	テキストとして「宇宙からの訪問者」「テレバシ ー開発法」を持参。東京本部月例会における久保 田先生の講義録音テープ公開。テレバシー練習、 質疑応答、座談会。

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

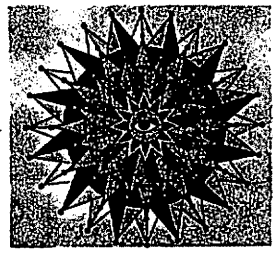
No.88 主要記事「驚異の高松市円盤降下事件」/伊藤運夫/「人工衛星による写真と地球上の異様な発見物」ウィリアム・ブライアン/「米政府はUFO問題の真相を公開せよ」ダニエル・ロス/「太田市上空に頻出するUFO」久保寺信一/「不思議な予知夢の実現」内藤重雄/「テレバシー開発基礎トレーニング」久保田八郎

No.89 主要記事「八ヶ岳に出現した円盤」秋山京子/「富士山麓にUFO頻出」高梨和明/「金星文字解読研究」迫藤昭則/「ノアの箱舟とアブラハム」久保田八郎/「アストロイド帯と月のクレーター」ウィリアム・ブライアン

No.90 主要記事「朝霧高原の不思議な月」伊藤運夫/「旭川にも月擬装UFO出現」石川剛道/「尾道市に出現したアダムスキー型円盤と母船」/「ムーンゲート第14章(完)」ウィリアム・L・ブライアン/「アダムスキー問題の真実性と宇宙哲学実践法」久保田八郎

各 ¥ 700
バックナンバーに限り送料は不要

「テレバシー開発法」解説講義録音テープ
昭和60年1月より1年間にわたって東京月例研究会で毎月1〜2章ずつ日本GAP会長・久保田八郎先生が解説される録音テープです。アダムスキーの宇宙的哲学の中心をなすテレバシー開発は、宇宙的人間になるための重要な条件。平易な解説と深遠な内容をぜひお聴き下さい。各支部月例会用の必須のテープ
テープ1本(90分) ¥1000 2200
※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい(第1章より在庫)。
〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL. 0534-52-8502 / 振替名古屋7-51065



①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真)
②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は「すべてを見透す眼」で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービスクラ・カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥600千120 ②¥300千60一括注文の場合千120

本誌とじ込み用
バインダー
濃紺地に金色の誌名背文字入り豪華版。1個に本誌12冊がとじ込めるので保存用に最適。
(品切れ・絶版)

③ゼナーカード
テレバシー練習用
アメリカで開発されて世界的に広まったテレバシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。
美麗箱入り。
¥600 千120

日本GAP

編集後記

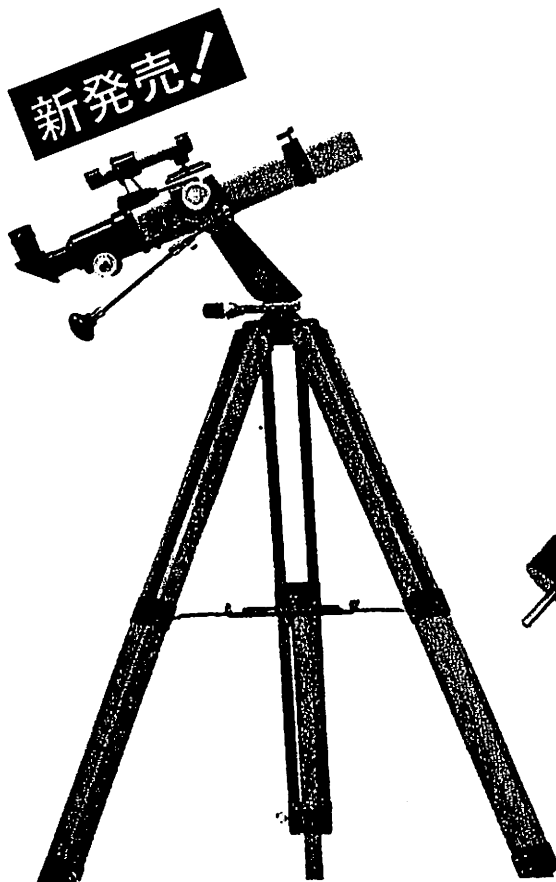
○読者待望の「円盤に乗った日本人少年」を一挙十六頁にわたって掲載しました。この驚異の実話こそ全世界のUFO研究者渴望の大事件といえるでしょう。いづれ英文版にも載せて各国のUFO研究団体に配布の予定ですから世界的に広まると思えます。
○「ラジール人教授の円盤搭乗事件」も信憑性ある素晴らしい記事です。こうした友好的な高貴な異星人を英フライイング・ソーサー・レミュー型乗員、と呼んでいるのは注目値します。妖怪のごとき宇宙人の出現報告が何を意味するかはもうおわかりでしょう。
○「アダムスキーの「質疑応答」」の連載を開始しました。古い書物ですが内容は重要です。次号以降を二期待下さい。「GAP短信」、「トビックス」も精選した内容です。
○いま編者の机上には世界各国から来たUFO関係資料が山積してはいますが、無味乾燥な記事が多く、依然としてオバケ宇宙人の出現が目立ちます。フライイング・ソーサー・レミュー誌編集陣がうんざりするのも無理はありません。アダムスキー問題がこんな次元をはるかに超えていることは論をまちません。本号ではア氏の宇宙哲学と従来の地球上の哲学(特に西洋哲学)との間に大差があることを松原真弓氏に解説していただきました。「地球の哲学と宇宙哲学の相違」がそれです。味読してみして下さい。この記事は必ず役立ちます。
○八月月上旬に静岡駅ビルで開催されたUFO写真展(静岡支部主催)は驚くべき大盛況で期間中はスペース・ビープルらしい人が数多く入場したということです。松山市でも初回の

大反響にこたえて二回目のUFO写真展を開催予定です。声援を送って下さい。
○九月二十二日に銀座カスホールで実施された今年度総会も出席者二百三十名という盛況で大成功でした。参加者各位に厚く御礼を申し上げました。今年度地方支部大会もまだ四カ所で開催されます。地元の方々の多数ご出席を期待しています。
○英文版UFO第2号を年末に発行予定です。「円盤に乗った日本人少年」宇宙哲学実践法「奇跡を起こす方法」その他の格調高い記事を掲載します。第1号の海外反響からみますと、日本GAPが宇宙哲学の実践、特にテレバシーの開発練習に主体をおいていることに外国の研究団体は関心の目を向けているようです。
○本号より本文記事の文字を大きくし、読みやすくしました。また本号はトップ記事が長いためにサービスクラして四頁増やし、四十四頁になっています。
○本誌は約百名のボランティアの方により都内と全国主要都市の書店に直接卸されています。宇宙のカルマをもつ人の発掘とスベイス・プログラムの協力の意味で書店卸しに協力下さる方は一報下さい。説明書をお送りします。
○六十一年度の東京月例会における講習テキストは多数の方の要望により、「生命の科学」を一月より使用しますのでご持参下さい。
○東京月例会は一月十一日(土)の月例会終了後、六時半より別会場「竹塚」で恒例の新年会を開催します。会費はススキヤキ+放題飲み物付きで二千九百円。定員五十五名。多数ご参加下さい。

会員募集
日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1981年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団/多数の会員と共に宇宙的人間を自指そう/入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう/ --日本GAP--

日本GAP機関誌・季刊 冬季号
UFO contactee 91号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP A部
〒13 東京都江戸川区本一色町6-1111
☎03-6551-0958
振替東京41359912
昭和六十年十月二十日発行
定価七〇〇円・送料200円
※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

光学性能に優れた サテライト天体望遠鏡。



短焦点屈折経緯台

A-63F 定価 ¥38,500
送料 ¥1,500

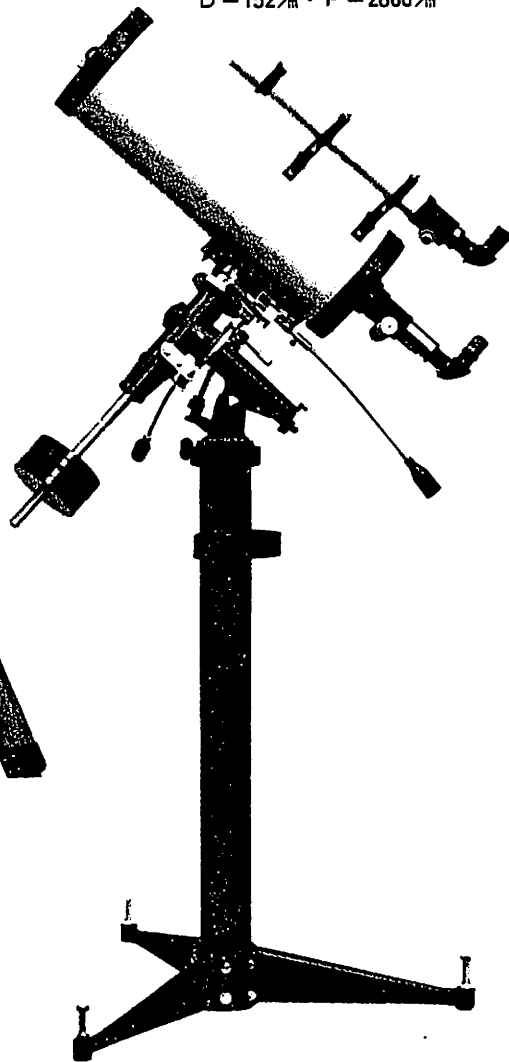
D=60% F=400%

〈付属品〉

SR-5%・HM-12.5%
ダイヤモンド、ムーングラス
5倍17%ファインダー
木製三脚付

R-6 定価 ¥320,000

D=152%・F=2800%



■特約店 群馬：前橋至誠堂

T E L . (0272)65-2718

東京：ア ト ム

T E L . (03) 866-5255



株式会社 山本製作所

〒174 東京都板橋区大原町5-3

T E L . 03 (966) 2 4 0 8